

IV

メインフォーラムの概要

■ 開催日 平成25年11月16日(土)・17日(日)

■ 会場 **マリオス** (JR盛岡駅西口そば)
メイン会場 盛岡市民文化会館 大ホール
分科会会場 盛岡地域交流センター会議室等

学び ————— つなげる 広げる

学び合い 分かち合い つながり合い
生涯学習の新たな視点を岩手から全国へ発信

夏のプレフォーラムを皮切りに、県内被災地において、学生を中心とした若者が、「自ら考え」「集い」「学び」「交流を深める」支援活動に主体的に取り組んできた、その成果を発表した。

また、全国各地の地域コミュニティ再構築に係る先進的な事例に学び、「次世代へつなぐまちづくり、人づくり」について参加者全員で学び合う機会を提供した。



プログラム構成

【1日目】

11月16日(土)			
マリオス(盛岡駅西口そば)			
時間	大ホール	18階会議室	エントランスロビー
9:00	受付 9:30~10:00		ポスターセッション・映像上映
10:00	オープニングイベント10:00~10:40		
11:00	特別講演 10:40~12:10		
12:00	昼食 12:10~13:10		
13:00	フィールドワーク報告 13:10~14:40		
14:00			
15:00		パネルディスカッション 15:00~17:00	
16:00			
情報交換会 18:00~ ホテルメトロポリタン盛岡本館			

【2日目】

11月17日(日)			
マリオス(盛岡駅西口そば)			
時間	大ホール	18階会議室	エントランスロビー
9:00		ワークショップ 9:00~12:00	ポスターセッション・映像上映
10:00			
11:00			
12:00	昼食 12:00~13:00		
13:00	復興支援ミニライブ 13:00~13:30		
14:00	クロージングイベント13:40~15:00		

プログラム内容

【1日目】 11月16日(土) 10時～17時(受付 9時30分)

(1) オープニングイベント

「地域みんなの力で郷土芸能復興」 大槌町立吉里吉里中学校

吉里吉里中学校がある大槌町吉里吉里地区は、東日本大震災により大きな被害を受けた地区のひとつである。震災後同中学校では、地域の保存会の方々からの支援により地元に伝わる吉里吉里鹿子踊(ししおどり)、吉里吉里大神楽(だいかぐら)、吉里吉里虎舞(とらまい)に全校で取り組んでいる。メインフォーラムのオープニングとしてそのなかから「吉里吉里虎舞」を勇壮に演舞した。



(2) 開会行事

主催者挨拶

文部科学省 大木 高仁 大臣官房審議官

実行委員長 岩渕 明 岩手大学副学長

歓迎の言葉

岩手県知事 達増 拓也

(大木高仁大臣官房審議官挨拶全文)

皆さん、全国からおいでくださりましてありがとうございます。幸い天気にも恵まれて、いい大会になるのではなかろうかという予感がいたします。

全国生涯学習ネットワークフォーラム2013岩手大会の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。はじめに、東日本大震災において大切なご家族やご友人を亡くされた方々、今なお不自由な暮らしを余儀なくされている方々に改めてお見舞いを申し上げる次第でございます。

現在我が国は、急激な少子高齢化の進行、社会のつながりの希薄化といった危機に直面しております。しかしながら、東日本大震災における甚大な被害の中にあつて、住民の方々が互いに支え合う姿は、人の絆が今も強く存在していることを印象付けました。人の絆、地域の絆を深め、未来志向の地域づくり・社会づくりを支える人材を育成していくことは喫緊の課題であります。

この全国生涯学習ネットワークフォーラムは、行政や大学等の教育機関、NPOや民間団体、企業等の関係者が一堂に会しまして、多様な主体が協働した地域づくり、社会づくりについての研究協議等を行い、その成果を発信するとともに、継続的な取組が推進されるよう様々な分野にまたがる関係者等のネットワーク化を図るための取組でございます。本年度3回目ということになります。



(大木高仁大臣官房審議官挨拶全文 つづき)

これまでの3年間、このフォーラムでは、東日本大震災からの復旧・復興や震災から見てきた全国共通の課題解決をテーマとしてきておりますが、とりわけ今回の岩手大会におきましては、復興支援のため全国各地から集まった大学生が活躍をしてくださっています。本大会を通じて、被災地で学んだ貴重な経験を全国に発信されるとともに、新たなネットワーク形成の契機とされることを願っております。

結びに、本大会開催にあたりまして多大なご尽力をいただきました、岩手県、それから県内各市町村、岩手大学の皆さん、また参加学生の取組を温かく見守り、支えてくださった岩手県各地域の皆様へ深く感謝を申し上げますとともに、この大会が実り多いものとなることを祈念いたしまして、私のご挨拶といたします。それでは、皆さん、よろしく願いいたします。

(3) 特別講演 「イーハトーヴ交響曲に込められた 賢治の想いと震災復興への願い」 講師 作曲家 富田 勲 氏

(聞き手 IBC岩手放送 アナウンサー 土村 萌 氏)



〇聞き手

富田先生は昨年「イーハトーヴ交響曲」を完成され、ことしの8月29日には花巻市での公演を皮切りに全国4会場で公演を行い、各公演とも大盛況でした。

「イーハトーヴ交響曲」は、宮沢賢治の作品世界を題材とし、初音ミクをソリストに起用したことで話題となりました。その功績により平成25年度宮沢賢治賞を受賞されました。本日は、その「イーハトーヴ交響曲に込められた賢治の想いと震災復興への願い」と題しまして、宮沢賢治作品と出会った富田先生の少年時代から「イーハトーヴ交響曲」作曲のエピソード、そして初音ミクの起用など、貴重な音楽、映像なども交えまして、対談形式でお話を聞いていきます。

(以下、講演要約)

〇宮沢賢治との出会い

小学校3年のときに観た、「風の又三郎」の「どっどど どどうど」というあの有名な部分「風の又三郎」のテーマ。映画のストーリーとともにそれが印象に残っている。その後「銀河鉄道の夜」を読んだときに何か光をすごく感じ宮沢賢治のファンになってしまって、その記憶がまだ消えていない。

〇イーハトーヴ交響曲を作曲した経緯

東北大学の学長をしておられた西澤潤一さんが、「雨ニモマケズ」の額を私のところへ送ってこられて、これを何とか歌にしてほしいと言われたが、これは非常に恐れ多いという思いもあり、10年前のことだったのだが、ずるずる、ずるずるとできずにいた。けれども、やはり幾ら何でも10年もたってしまうと、つくりますと言った手前、放っておくということとはできない上に、今回のこういった震災もきっかけにしてどうしてもこれはつくらねばと。

「雨ニモマケズ」だけではなかなか曲としては発表しにくく、一つのシンフォニーの中の1曲というような形にしないと、インパクトが弱いのでその前後も考えた。

宮沢賢治の話を、音楽で表現するとこうなりますよというのは恐れ多いので、子供のころから「銀河鉄道の夜」にしても、「風の又三郎」にしても、自分が感じたものを素直に僕なりの表現ができればいいと思って、そういうふう考えたらずごく気が楽になって、それで一曲でき上がった。賢治の弟さんのお孫さんに当たる宮澤和樹さんに、「どうも本当の宮沢賢治さんの精神と、これは違っているかもしれない。僕なりの解釈で今回書きましたので」と言ったら、「それでいいんですよ。そういうふうにして進化していくんですよ」というようなことを言われて、それでいいんだと思った。やっぱり宮沢賢治という人は、人間こういうふうに生きるべきだとか、全然そういう感じはない。あなた方が感じればいい、自分がどうするかは、それぞれ別だという考えで読めるところがいい。

〇賢治の世界と自身の音楽世界

僕がシンセサイザー、電子音で表現するときに、賢治の世界が気持ちの中にある。僕がシンセサイザーで演奏したドビュッシーのピアノ曲、余りみんなの目につかない存在だが、これが賢治の妹トシを描いたつもりで、ドビュッシーのピアノのぼろん、ぼろんという、原曲はそういう音で、「雪の上の足跡」という曲なのだけれども、この足跡がどう見ても雪靴とか長靴ではなくて、「二の字二の字の下駄の跡」だった。雪の感じが賢治の世界を連想させて、二の字二の字の下駄の跡がずっと続いて、雪の日に結核で24歳で死んだトシの歩いていった足跡を想像させる。今お聞かせするが、途中でふっと、賢治と非常に仲がよかったトシが子供時代に川遊びもしただろうし、昆虫とりもしただろうと。その幸せだったころの様子がふっと出てきて、ふっと消えてしまう。それで、また二の字二の字の下駄の跡が続くだけけれども、最後は何というか、地面の底に埋もれてしまうという暗いものではなく、行った先にふっと太陽の光が薄くあらわれるみたいな、そんな感じで終わったと。これは、僕の気持ちの中には賢治の世界があったので、ぜひ皆さんにお聞かせしたい。

(音楽再生) 「雪の上の足跡」

(音楽再生) 「雨の庭」

(主な内容 つづき)

○シンセサイザーとの出会い

NHKの「立体音楽堂」、まだテレビが出る前ですよ。NHKのラジオ第1放送と第2放送でステレオにして豪華番組を大編成のオーケストラで放送したことがあった。20歳そこそこの若造で大編成のオーケストラの譜面が書けるチャンスに、もう夢中になってやった。その結果いい評判を得られ、次から次へそういうことをやっていたのだが、途中でびたっとイメージが湧かなくなりました。モーツァルトとかワーグナーの時代まではものすごく楽器というのは進歩したが、ワーグナーの時代で楽器は天井につくほど素晴らしい音になってしまっていて、改良されていない。一部あるかもしれないけれども、全体的には。

絵の世界では色彩のもとになるいろんな原料を使う。それは金粉であっても、石炭殻であつたっていいわけ。ところが、音楽の場合は石炭殻に匹敵するような音なんていうのは使わない。みんな素晴らしい音ばかりで、伝統楽器が。それでは、もう書きようがないなと思ってしまったところが30代のおしまい。そのころもうシンセサイザー、あなたの悩みを解決するものがアメリカにできていると。それが、例えばごらんになったかもしれないが、こういう機械。これは楽器という形にもなっていない。つまり音を出すいろいろな、大工道具で言えばのみとか、かんとか、のこぎりとかというものがこういうふうにおさまっている。自分のつくりたい音をコードでつないで、ボリュームで調整して、自分のイメージに合う一つの音をつくっていくというすごいものをモーグ博士というのは考案したものだ。



○初音ミクとの共演

ひ孫が初音ミクが好きでね。だから、「イーハトーヴ交響曲」のときにミクにとりつかれたというのは、ひ孫から。ひ孫はミクちゃん、ミクちゃんと大変。ひ孫の影響は大きかった。ミクに何となく仕草が似ている、何かミクがひ孫みたいな感じがして。

だが、それだけではなく、「イーハトーヴ交響曲」には、オーケストラあり混声合唱あり児童合唱ありだが、1人ソリストが欲しかった。誰にしたらいいかと悩んでいるときに、テレビで初音ミクを取り上げた番組があって、話には聞いていたのだが初めて初音ミクというのを見た。僕はモーグ(シンセサイザー)にしゃべらせようとしてなかなか人間の普通の会話みたいにかなくて苦勞していたが、それを初音ミクは自由にしゃべってしまうという、これは使わない手はないなと。(ビデオ上映)

それと、やっぱり異次元の世界というか、宮沢賢治のふつとあらわれてふつといなくなる。これは風の又三郎もそう、銀河鉄道のジョバンニもそう。何か異次元の世界からふつとあらわれてふつといなくなる。このキャラクターは使わない手はないと。

○新しい試みをし続ける原動力

何だろうね。興味かな。1つは、西澤さんからこれ書いてくれなしかと言われたのが事の発端なのだけれども、それにはもちろん「雨二モマケズ」が素晴らしい詩なのだけれども、いろんな要素がくっつかないと、やっぱりみんなに聞かれないから。譜面を書いても、それは1回公演しただけで、何か役所の引き出しの中へ入ってしまった、それっきりということがよくあるが、それではつまらない。やっぱりレコードにもしたい、ブルーレイビデオにもしたい。それには、ある程度買った人たちが、ああ、買ってよかったと思う、そういう気持ちにならなければ、その先長続きしていかないと思う。だから、インターネットでいろんな反響がすごくて、そういうフィードバックの中からそういったエネルギーが出てくるのだろうか。自分では余りよくわからない。意識していないから。ただ、好きだからやっているみたいなどころがある。

若い人たちが自分たちで開発したものというのは、その部分というのは教えられたとかそういうことではなくて、本能の部分に入ってくる。ぐんと横で押されたら、ぱっと足がこちに出ると。押されて体が傾くから、それを支えるためにこちの足が出るなんて誰も考えてはいない、本能的になるもの。

だから、一生懸命やると、自分の中の本能的な部分がどんどん開発されていく。そうすると、それが結局芸は身を助くではないけれども、そういったことがやっぱり将来自分が社会で生きていく上において、非常に重要な部分になっていくと僕は思う。



本当にこういう人たちを見ていると将来が楽しみ。僕はあと何年地球にいさせてもらえるかわからないけれども、80歳になってしまって、そう長くはないことは確かなのだけれども、やっぱりああいう連中と一緒にいると、わくわくしてくる。そのわくわく感というのがやっぱり何をやる上でも必要なのではないか。あまりこうするべきだとか言う賢治の精神に反するし、僕もそういうことを言う、生き方って好きではないので。

(わくわくすること、興味を持つこと、そういったものを大事にしていけば、学ぶこととか意欲につながっていくということ...) そう、そう。身を助くというか、それでもって得たものがまた次に応用できる。そして応用というのは、そう思わなくても自然に出てきてしまう。だから、やっぱり若いうちというか、もうとにかく興味があるものには一生懸命になればよかっただけのことは絶対あると思う。

○今後の目標と若者へのメッセージ

この歳になると、いつ強制退去になるかわからない。自然は、50代ぐらいまでは、何か大げなことをしても治そうとする。60代から70代になると、まあ、この辺でいいだろうというので、余りかばってくれなくなる。80になると、逆にいろんな病気を理由つけて早く追い出そうとするからね。その手には乗らんぞと。頑張るのが精いっぱい。そうやっている間に、またいい作品ができる僕も幸せだなと思って頑張っている。

(若者へのメッセージを…)

そんな大それたことは言えない。宮沢賢治さん好きだし、あの人は一言もそういうことは言っていないので、やっぱりそれぞれが自覚を持って。人生って限りあるから、やっぱり自分は生きてきてよかったと思えるような気持ちで生きていかれたらいいのではないかなと思う。どうすべきとか、どうしたらいいとかというのは人それぞれだし、ちょっとその辺は僕にはわからないのだけれども、そこから想像してほしい。



(4) フィールドワーク報告

「被災地における訪問体験活動～大学生が創る訪問プログラム」

大学生が企画・実施した復興支援活動(フィールドワーク)を踏まえ、復興や地域の活性化のため、若者がどのような活動ができるか、その成果と課題について報告を行った。

【トータルコーディネーター】

岩手県中核観光コーディネーター **草野 悟 氏**



① 「PiKA PiKA 光の支援メッセージづくり」<宮古市>

発表者／富士大学 経済学部 2年 山路 愛里 さん
盛岡大学 文学部 2年 小川 千尋 さん 他
コーディネーター／地域コーディネートセンターみやこ代表理事 金野 侑 氏

② 山田発！食のこだわりマップづくり <山田町>

発表者／盛岡大学 文学部 3年 五十嵐 由香 さん
盛岡大学 文学部 3年 佐々木 佳実 さん
岩手県立大学 社会福祉学部 2年 澤田 崇弘 さん 他
コーディネーター／岩手大学三陸復興推進機構 特任研究員 船戸 義和 氏

③ 秋祭り DE 地域交流 <宮古市>

発表者／盛岡大学 文学部 3年 酒井 涼 さん
盛岡大学 文学部 1年 森居 瞭平 さん
岩手県立大学 看護学部 2年 古谷 彩華 さん 他
コーディネーター／(一社)子どものエンパワメントいわて 学習支援課長 浅石 裕司 氏

④ 連携フィールドワーク「足湯ボランティアin 陸前高田」<陸前高田市>

発表者／岩手大学 工学部 2年 伊藤 大 さん
富士大学 経済学部 3年 齋藤 匡平 さん 他
コーディネーター／岩手大学三陸復興推進機構 プロジェクトマネージャー 楡井 将真 氏

オープニング(草野トータルコーディネーター)

東日本大震災から2年8カ月経過、様々な課題、問題が時間の経過とともに浮かび上がってきた。大きな事業も着々と進行し、沿岸各地では多くの工事関係者が日々工事を行っているし、地域の産業復興のために各経済界、産業界からも多く訪れている。また、「あまちゃん」ブームもあって、観光客も徐々に、復活してきているものの、被災地の応急仮設住宅に住んでいる皆さんはどんなふうに思っているかということ、今日のテーマでもあるが、ある大学が調査した結果によると、初期よりもボランティアの数が減ってきて、話す相手がいなくなってきた非常に寂しいという声が多い。また、被災者の皆さんも苦労しているが、なかなか自分の家を建てられないと。そこには数限りない大きな課題が隠れており、その中で我々も日々関わってきたし、全国からの学生たちもどんなことを組み立てて、どんなふうによっていったらいいのかということに常に考えてきた。

そういった中、プレ・フォーラムというものを宮古エリアを中心に実施し、地元で地域活性化に取り組んでいる若い方々の声を直接聞きましようということで、いわばマーケティングリサーチであるが、そこに皆さんが行って膝を交えてその方々、活動している現地の人たちの課題、悩み、問題、これを聞いた。その上で、いろいろな取り組みをフィールドワークとして行った。これから発表するのは、ちゃちだと思われるかも知れないが、そういった背景のもとに自分たちがやれること、つまり今日のテーマである、つないでいくということはどういうものなのかということに対して取り組んだ結果であり、そういった意味でお聞きいただきたい。

何よりも、各大学の枠を超えていろんな学生さんたちが1つのテーマに向かって侃々諤々やってきたと。そして、実際に行動してきたということ自体が私は成果であり、さきほど富田先生がおっしゃった、被災地にとってはこういった言葉は不適切かもしれないが、「わくわく感」を持って、取り組めたのではないかなと思う。

① 「PiKA PiKA 光の支援メッセージづくり」<宮古市>

我々のグループでは、プレ・フォーラムで行った地域の方々との交流、そして大学生同士のグループの討議の結果を受け、テーマを集会所設置によるコミュニティー再生の取り組み、子供を中心としたすっからみ交流とした。「すっからみ」とは、みんなを巻き込むという意味で、宮古地域の方言。我々は、さらにテーマを絞り、子供をすっからみの核に、幅広い年代の方々が集い、楽しい活動ができる企画を行うことでコミュニティー再生の一助にしたいと考えた。

グループ会議では、当初、子供からお年寄りが楽しめる活動として地域交流卓球大会を計画した。その後、代表者が直接足を運び、地域の方々と相談したが、時期的に行事が重なっており、幅広い年代の方が集まることは難しいということで断念した。やはり地元の声を十分に聞き、考え、調整する必要がある。



我々が考えていた子供をすっからみの核にして交流するという目的は変えずに、地域が一体となって元気になれる活動はほかにはないか、再度話し合いを重ね、ピカピカアートという映像製作にたどり着いた。これは、暗いところで懐中電灯やペンライトの光などをシャッター速度を遅くしたデジタルカメラなどで撮影したものをつなぎ合わせ、映像を作り出すというもの。(ここで実演)

その後のグループ会議で、今年は宮古市田老にある県立宮古北高校でこのピカピカアートの取り組みを行っていることがわかり、フィールドワークの内容を高校生との交流を出発点にして地域を巻き込む、すっからんでいく交流にしたいと考えた。8月28日には、事前学習として、宮古北高校を訪問。総合的な学習の時間に映像製作と芸術鑑賞としてピカピカアートに取り組んでいた高校生と交流を持った。初めは緊張していたが、担当の先生から、「ふだんは高校生だけの取り組みなので、なかなかアイデアが出ず、時間がかかることが多かった。今回は、大学生に参加してもらうことでいい刺激になったようで、新しいアイデアが出た。生徒たちは、楽しく活動していた」との感想があった。

9月11日には、本番のフィールドワークとして、宮古市でピカピカ光のメッセージづくりを行った。この日は、午前中に宮古市立津軽石中学校の1年生と交流、午後には事前学習会で訪問した県立宮古北高校での交流、夕方には、地域の方との交流をするために田老駅に移動した。ピカピカ光のメッセージづくりを田老駅で行うことは、事前にフェイスブックやメール、口コミなどで周知していたが、当日何人の方が来てくださるかとても不安だった。暗くなるにつれ、お子さんから年配の方まで十数名の参加があり、ピカピカアートを通して地域の方と一緒に映像をつくることで、笑顔が多く見られたのが印象的であった。

参加した方にお話を伺うと、「楽しかった。こんな表現方法があるとは知らなかった。大学生が進めているからすばらしい。また、この企画は記録に残るからいい。今後もこのような機会があればいい」と言っていた。



学生の感想:

○高校生のときから宮古市などでボランティア活動をした経験があるが、今回大学生になってフィールドワークを行って感じたことは、笑顔がふえたということ。笑顔が見られたこのフィールドワークは、本当にいい経験となった。今回のように企画から実施までできた、やりたいと思えるボランティア、そしてやりがいのあるボランティアを継続して、少しでも復興の力になれるようにしたい。

○自分が支援する側であることをもっと自覚し、より積極的に話しかけたり意識的に動いたりしなければいけないということ。今までのボランティアは、与えられたことを進めることが多く、正直誰かがやってくれるだろうと思うことがあった。しかし、今回は自分たちで考え、行動する場面がたくさんあり、ボランティアについて深く考えることができた。私たち大学生にしかできないこともたくさんあると気づいた。

コーディネーターのコメント:

このグループは紆余曲折を経ながら、結構メンバーも入れかわりながらやってきた。

光を書いたからどうなのだというふうに見える方も多いと思うが、今回体験してきた中で、学生の感想にあったとおり、その地域のことをどう感じ取って、それをそこからまたどういうふうにつないでいくのかというところが課題として出てきたと思うので、今後ともボランティア活動に限らず、少しでも三陸に関わっていくことをしていただければと思う。



コーディネーター
金野 侑 氏

② 山田発！食のこだわりマップづくり <山田町>

私たちは、「山田発！食のこだわりマップづくり」と題して、山田町の食と人の魅力を紹介するマップづくりに取り組んだ。

山田町が抱える問題は、長年の過疎化に加えて、震災後加速する人口の減少である。震災後、山田町は12%という人口減少率になった。これは県で3番目に高い。そこで、課題として挙げられたのは、交流人口を増やすということ。その中で、私たちは、町に人を呼ぶために、山田町にきたい、山田町のあのの人に会いたいと思えるような町の魅力を発信することが必要だと考えた。キーワードになったのは、「人プラス何か」。山田町の人の魅力と景色や文化、食などの魅力が合わされば、交流人口の増加につながると考えたのである。



町の魅力を発信するためには私たち自身が山田町についてよく知る必要がある。

山田町のことをもっと知るために、山田町に行った。私たちに何ができるのか。お店を紹介する手段がない、道路の整備など交通網の発達により都市部に人が流れてしまう、いわゆるストロー現象が起こっている現在、山田町を通過点ではなく目的地にする必要がある。人、景色、文化、食など、たくさんの魅力はあるものの、それらの発信が十分でない。人プラス食というコンセプト、さらに私たちが魅力を感じることでできる対内的発信、そして私たち以外の方が魅力を感じられる対外的発信、これらが継続して達成できる方法は何なのか。学生たちが直接食を味わい、人と向き合い、体験したことを伝えるためのマップをつくりたいと考えた。マップをつくるに当たって、9月17日から19日の2泊3日、山田町でフィールドワークを実施した。

このフィールドワークのミッションは、町の人の魅力と食のこだわりのポイントを探るということ。この食のこだわりというのが後々結構難しく、作り手の人の思いとか、一見目には見えない魅力を引き出さなくてはならず、それを探るのが大変だったが、山田の人や文化を大切に思う心に出会うことができた。食へのこだわりを持った人がこんなに山田町にいるとは思わなかった。みんな山田町が大好きで、山田町を活性化するために夢を持っていて、みんないい生き方をしている。こういった方々のつくったものをまた食べに行きたい、また会いに行きたいと思う。こういったことが交流人口をふやす要因につながって行くのではないかと。

フィールドワークを通して大学生自身の変化もいくつかあった。例えばカキいかだの養殖の体験を通して養殖業の大変さを知った人、山田町の郷土菓子のこだわりを知って、地元に戻ってから、その地元の郷土菓子のこだわりは何なのとおじいちゃんに聞いた人、実際に一緒に地元の郷土菓子をつくった人もいた。

このようにフィールドワークを通して、私たちは目に見えない山田町の人の魅力とか食のこだわりというのを知ったのだが、まだまだ山田の人と観光客の交流というのはなくて、せっかくのこだわりというのがまだ伝え切れていないという現状にある。このことから今後は食のマップをつくるだけではなく、山田の人と話したいとか、山田の人ともっと交流したいと思えるような仕掛けのあるマップやホームページをつくっていかねばいけないと改めて感じた。



今回マップづくりに先立って、食のこだわりマップのホームページを作成した。皆さんのお手元にもこちらと同じ資料があると思うので、ごらんいただきたい。内容は、私たちがフィールドワークを通して知ったこだわりの食とか、人の魅力というものを紹介している。学生の体験記というのも写真と一緒に紹介している。「このように、山田町には人の魅力、食のこだわりがたくさん詰まっております。ぜひこのマップをおともに、一緒に探しに行ってみませんか。」

コーディネーター コメント:このチームは、4つの異なる大学から参加した9人の学生たち。山田町に行くのも初めて、もしくは岩手県に来るのも初めて、被災地を見るのも初めてという人もいた。そういう人もいれば、もう自分の研究で何回も被災地には行っていますという人もいた。このフィールドワークを通じて、山田の魅力がすごく感じたというところもあり、さらにこのチームがまたチームとして非常に成熟してきたというのがある。

(学生):ワーキング・グループに入ったときから「人に会う」ということがちょっとよくわからなくて、人に会いたいからまたその土地に行くと、「何だ、そんなことがあるのか」みたいな感じでいた。けれども、今回のフィールドワークに参加して、運営して、一緒につくって行って、本当に人に会って、本当の出会いをして、人の魅力を再発見できた、出会いの魅力を再発見できたかなと思えた。これが詰まった僕たちのマップなので、自画自賛ではありますが、とてもいいものができたと思うので、皆さん見てくださいね。

コーディネーター:学生たちがすごく力のある言葉を発することができているのは、きょう午前中のお話にもあったように、本当に一生懸命やったからだと思う。この体験を今度発信していくということをこれからホームページと、それからマップづくりで行っていければよい。



コーディネーター
船戸 義和 氏

③ 秋祭り DE 地域交流 <宮古市>

プレ・フォーラムで学んだことを参考にしながら自分たちの企画を考えていく中で、4つのキーワードが見えてきた。地域愛、交流人口、世代間交流、閉じこもりの4つ。

地域愛。仮設の新しいコミュニティの中でも、地域愛を感じてもらうことが大切。

次に、交流人口。学生ボランティアもその一つ。地域の外の人がかかわることで地域の活性化にもつながる。

次に、世代間交流。全世代が参加できるイベントを通して世代間交流が行われるようにしたい。

最後に、閉じこもり。仮設にお住まいの方のお話で、仮設から出てこない、いわゆる閉じこもりの方がいる。閉じこもりと言われる方が外に出るきっかけ、周りの人とかかわるきっかけをつくるのが大切。



具体的に何をするか。私たちが着目したのは、みんなが楽しめるイベント。大人も子供もわくわく、どきどきするようなものはないか、思わずのぞきに来てしまうものはないか。そこで考えたのが秋祭りである。しかし、それだけでは、楽しかったで終わってしまう。上記の4つの目的のために、秋祭りというツールを使って、流しそうめん、昔遊び、花火をする、ここまではいいのだが、そこから始まる企画にしたいと私たちは考えた。そのため、この企画に3つの仕掛けをつくった。①地域にある資源を使う②学生と地域の人と一緒に行動する③住民の皆さんの強みを生かす、この3つの仕掛け。

それに加え、学生から仮設の皆さんへ提供する側、される側という一方的な矢印ではなく、住民の皆さんみんなを巻き込んでつくり上げていこう、そんな企画にしたいと考えた。

地域愛は、会話を通して育むことができる。会話を通して相手のことが好きになり、あの人がいるから、この理由でその地域が好きになるのも立派な地域愛。今回のイベントを通して、多くの会話が見受けられた。交流人口は、地域に入り活動し、人と触れ合うことによってその地域が好きになる、そして何回も岩手に来たいと思ってもらう。さらに友達に伝えることによって、その友達にも岩手に興味を持ってもらうきっかけにもなる。岩手の大学生と一緒に行動し、2回目以降の活動をバックアップすることによってまた来やすい環境を整えることができる。世代間交流は、子供と高齢者の交流は難しいとされているが、高齢者から子供へではなく、間に私たちのような大学生を挟むことによって、環境を整えることができるのではないかと。

4つのうちの最後、ふだん出てこない人に出てきてもらうということだが、この問題への明確な答えは見えていないが、大切なのは、出てこられない人の把握、そして出てこない人に対しては自然にアプローチをかけるということ。



全体を通して感じたことは、イベントはゴールではなく入り口であるということ、そしてイベントは新たなことに気づき、次へのステップになるということである。このことを私たちがかわかっていく学生ボランティアに伝えていきたい。

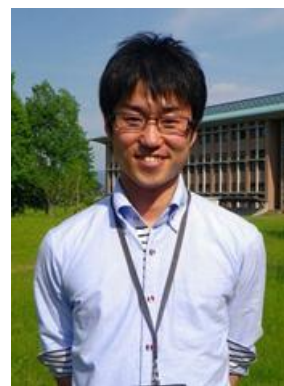
先に発表したピカピカアート、山田発！食のこだわりマップのような形あるものではないけれども、私たち自身が全国の岩手に来たいという学生たちの窓口となり、そして時には今回のようなイベントモデルを利用しながら岩手のこれからを支えていく、これが私たちの成果である。

コーディネーター コメント:

きちんと地域の課題を見詰めてくれたと思う。キーワーを4つ出していたが、仮設の閉じこもりだとか、どういふふう交流人口、それから岩手県に人が来てくれるかなとか、そういった視点をどうしたら取り組めるかということを実際に向き合ってくれたことが大きい。

2つ目は、イベントがどうだったかということ彼らは報告しているのではないと私は聞いていて感じた。イベントをすることによって、どのようにそれを企画するか。例えばかなり地域の方にご協力してもらおうというふうな関係性を築いたとか、仲間をどのように集めていくかとか、何をやるかよりも、どうやってネットワークを広げていくかというところに焦点を置いてくれたことが成果ではないかと。

今後のことだが、確かにイベントでそのとき交流したのはよかったけれども、今後どうするのたいと聞いてみた。そのときに彼が何と言ったかという、僕たちが岩手県のコーディネーターになりますと。さっき交流人口の話もありましたし、どうやったら岩手県が活性化していくかということ自分たちで企画をして、実施をしてというネットワークを広げていくコーディネーターに私たちはなりますと言ってくれたことが私はうれしくて、次につながっていく頼もしい学生たちと思っている。



コーディネーター
浅石 裕司 氏

④ 連携フィールドワーク「足湯ボランティアin 陸前高田」<陸前高田市>

「足湯」は、たらいに湯を張って、そこに足をつけてもらって、手を軽くマッサージするというか、もみほぐすということをしている。1対1の関係性の中でお話ができるので、ほかの人の目を気にせずに、個人としての信頼関係が築きやすいということが「足湯」のいいところ。

阪神・淡路のときからこういう足湯ボランティアが始まって、この東北でも普及してきたというところ。

加えて手芸活動として、「まけないぞう」というタオルでつくったゾウの手芸、これも阪神・淡路のときに発明されたもので、これはつくるのが難しく、30分ぐらいかかる。どういう効果があるかという、震災直後はそれを忘れられない、頭から追い出せないのが多くの方の現状であって、そのときに手芸に没頭すると、その30分間は何も考えなくても済む。学生に教えてもらったゾウさんを趣味として続けていただいていた、生きがいづくりになっていると思っている。



神戸大: 足湯や手芸の活動を通じて、ボランティアと被災者というような関係性ではなく、「僕個人」と「何々さん」という関係性を築いていって、そこで信頼関係を深めていく中で、普通はなかなかお願いできないこととか、言いづらいこと、他の人には言えないことをぼろっと話してもらったりして、そこから今感じている不安やニーズを拾い上げて、また次向こうに行くときにそれを改善できたという、こういう活動をしましよみたいのを一緒に作り上げたりして、バックアップしてあげたいと思っています。

神戸大: 足湯をしていく中で、向き合っている相手が喜んでくれているのかなど、疑問に思ったので、自分自身振り返ってみて、言葉遣いが固過ぎたかな等の反省点が幾つか浮かんできて、その中で語調をやわらかくして接したりとか、いろいろ工夫してみたところ、活動終わった後、たくさんの笑顔が見られたなと思えるようになった。ことしの9月、ある仮設に行つて活動をして、足湯とか手芸をやったのだが、仮設にはいろんなボランティアが入っていて、あるおばさんが「今までたくさんのボランティアが来たけれども、あなたにはこれまでで初めて心からまた来てねって言える」と言ってもらえて、僕自身が活動に行つて、僕個人がつながれたというのがすごくうれしかった。

東北大: 僕たちの活動で手芸というのは、主にこのまけないぞうというのをつくっている。学生が一方向的に手芸を教えるとかではなくて、住民の方から学生に「ここをこうしたほうがもうちょっとまいくんじゃないの」というお話もあり、住民の方同士が話し合ったりするという交流の場をつくるとにも手芸は役立っている。

富士大: 足湯のボランティアサロンを通して、今回とても実りのある体験となることができた。初めて足湯というものをやったのだが、沿岸の方と触れ合う、じかにさわるといふことで、今この沿岸の方がどう思っているのか、何がしたくて、そして何が足りないのかが足を運んだことにより理解できた。テレビや新聞だと、仮設の方がどんな姿をしていて、どんな顔で毎日を過ごしているのかがわからないので、だからこそやっぱり今回こうやって足湯のサロンを、ボランティアを通して沿岸に行けたということがとてもうれしく思う。



岩手大: 多くの大学で活動することによって、遠くから来る大学生の被災地に対する思い、地元の大学生として被災地に対する思いや、当時地元の学生の僕が被災して感じたこと、遠くの地で起きた震災で感じたことなどを話し合うことによって、ボランティアに対する強い気持ちを感じ合うことができた。

今年から足湯ボランティアに参加したが、今、震災当時よりボランティアに関する関心が薄れてきているこの状況で、地元の大学としてもう一度被災地に目を向けて、地元だからこそできることをしていかなければならないと感じた。

コーディネーター コメント:

(上手に)できない人というのは、学生さんには多いわけで、それで、やはり住民の方のほうができてしまう場合がある。だけれども、最初何だかよくわからないけれども、学生が僕たちが教えますとかとわけのわからないことを言って、そうやって入っていった、だけれどもできない。仕方ないな、教えてあげるよと。僕ら何もよくわからないのですよと。そうやって近づいていって、学生さんだから、では教えてやるかと、そういうような中で話しているというのがすごく大事なことだと思っている。もし学生が手芸のプロだったら、多分仲よくなっている。そういうのにすごく詳しい人だったら、警戒されて近寄らないと言われてしまう。だから、そういうところで学生としての役割だったり、学生だからできることというのをこれから継続的にやっていければいいのかなというふうに思うし、あとは岩手の大学としての役割というのも大事にしてもらいたいなと思うし、逆に神戸から来ている遠くのボランティアという存在の役割もこれから考えながら、一緒にやっていけるような体制をつくっていけたらなと思っている。



コーディネーター
楡井 将真 氏

トータルコーディネーター 総括

皆さんそれぞれのテーマによって、ばらばらのコンセプトのもとで被災地に向かって、しかもフラッシュアイデアではなくて事前の調査をしながら、そして地域の方々の現場の声を聞いて、現状を知って、そしてやってきた結果である。これらは一つのエリアの一つの点でのモデルだが、そのモデルをお聞きになった皆さんが、あるいはこれから発信していただくいろいろなメディアを通して、私ならばこういうふうにとできるとか、僕だったらこうやるにつながっていけば素晴らしい。

今現在被災地では本当にいろんな問題があり、100対ゼロで決まるケースというのはほとんどない。どんなことでも必ず片方にはアンチテーゼがある。中には、これは厳しい意見になるが、学生や大学の押しかけ支援だと言っている方もいる。また先ほど富田先生もおっしゃっていたけれども、手柄合戦という言葉もある。少なくともここにいる4チームの皆さんは、そういったところを超えて、そしてお互いの垣根を越えながら、そして学生であるという立場を考えて行動してきた結果がきょうの報告であろう。

そして、我々自身が気づかなくてはいけないのは、「次世代へつなぐ」という今日のテーマである。「次世代へつなぐ」とは、年上、経験者が上目線で指導することではなく、共に学び、同時に年長者も若い人たちの活動から学ぶことがとても多くあるということだ。

もうひとつは、「被災地」には「支援」に行くという感覚が一方通行になる。次の大きな災害に備えるための「学び」でもある。フィリピンで極めて大きな水害があり、世界中から支援活動の輪が広がっている。彼らは座学ではできない現場から大きな教訓を得ているのである。つまり「ギブ・アンド・テーク」。一方通行の「支援」というのはあり得ない。大いに学ばせて頂いて、次につなぎ、本当に安全で明るい社会を創っていくことが大事だろう。

また、高速道路とか、こういった震災復興のために欠かせない交通網が整備されているが、それに伴ってストロー現象というのも起きてくる。三陸沿岸は、もともと被災前から経済力の弱い地域で、これが仮に仙台まで、東京までスルーで行ってしまうと、人、物、あるいは情報、いろんなものが流れていく。そのときにどんな魅力をつくるのだと。逆に流れていくのを指をくわえて見ているのではなくて、この学生さんたちのようないろんな細かなアイデアから、いろんな取り組みから、一つ一つやっていけば、必ずやその地域に様々な効果が戻ってくると私自身は考えている。

そういった意味では、またこの後いろんなところでお話聞く機会もあると思うが、特に岩手県の交通事情で言うところ三陸鉄道、あるいは沿岸を走っているJR八戸線、一生懸命頑張りがながら交流人口拡大に努めている。今日のテーマの基本にある交流人口をどう拡大していくかということを生徒さんたちに学ばせていただいた。学生の皆さん、ありがとうございました。

文部科学省 早川俊章 生涯学習推進課長 講評

4つのフィールドワークについて、それぞれ貴重な報告をいただいた。どれも参加した学生の皆さんと地域の皆さんとの交流や絆というものが強く伝わってくる内容ばかりであった。

まず最初の「PiKA PiKA 光の支援メッセージづくり」。私も今回初めて見させていただいたが、身近なペンライトの光を使ったアートのすばらしさということはもちろん、中学生や高校生、そして地域の方々と一緒になって作品をつくり上げる醍醐味が良く伝わった。皆さんが「PiKA PiKA」を制作して、笑顔になって写真におさまっているというのもうなずける。また、学校でも、職場でも、地域でも、みんなの心を一つにする魔法の道具として、このペンライトをこんなふうを活用できることに驚いた。ぜひ世の中に笑顔と元気を提供する仕掛けとして、このような取組が全国に広がればと思う。

次に、「山田発！食のこだわりマップづくり」。3つのグループに分かれての実体験、郷土料理にパンやピザ、そしてカキにアカモクにうどんと、どれも地元の食材を使ったおいしいようなグルメである。また、さまざまな体験の過程で、地の製造者あるいは料理人の方々などと話をし触れ合う中で、自分なりに何かを感じ取られたことだろう。食のこだわりマップ、これは私も活用させていただきたい。

次に、「秋祭りDE地域交流」。仮設住宅での流しそうめんや昔遊びなどの秋祭り、特に私が印象的だったのは、ガイドブックの中にあっただが、参加した学生さんの中で、初めはこのイベントの意味は何なのかと考えることがありましたという声があった。しかし、その後を見ると、今では、かくかくしかじかということに気づきましたと書いてある。もちろん活動の狙いは、仮設住宅の方々とともに楽しみ、交流する契機をつくるということだろうが、被災地の方々にとってこれがどうなのか、自分にとってどうなのか、そして今後どうしていけばよいのかと、それを自問自答して、そしてお互いに話し合っけて掘り下げて考える、自分なりの結論を出すというそのプロセス自体も大変貴重な機会になったことと思う。

最後に、「足湯ボランティアin陸前高田」。これも足湯や手芸という身近なツールを使って地域の方々とは触れ合い、語り合う活動で、どの写真を見ても、自然な笑顔、また地域の方々や学生さんとの語らいが今にも聞こえてきそうな、ほのぼのと温かいものを感じる、そんな印象を受けた。ぜひ今後も継続していただきたい。

いずれの活動も、学生の皆さんは大変貴重な体験をされたことだろう。今回の共通テーマは、ガイドブックにもあるが、「体験、視る、気づく、考える、行う、つなげる」というもの。これは、学生の皆さんがいつか職業人になってからも、現場主義でしっかり情報を収集して状況分析の上、熟慮、判断し、実行に移すと。そして、その過程でさまざまな人間関係を大事にしてネットワークを築いていくという意味において、相通ずる大切な視点ばかりである。もちろん学生の皆さんは、今回いろいろ考えさせられることもあったかと思うし、また必ずしも十分時間を割くこともできなかったかもしれない。しかしながら、学生の皆さんは、確実に前に一歩踏み出したことと思う。被災地の復興を担う、またこれからの日本を担う若い人々には、できるできないということではなくて、やるかやらないかということがまず問われている。ぜひ今回の活動を機に、さらに自分なりのやり方で取組を継続、進化、発展させていっていただければ幸いです。最後に、今回の活動にあたり、快くご協力をいただいた全ての地域の皆様方に心から感謝を申し上げます。

(5) パネルディスカッション

「被災地復興から見えてくる地域コミュニティの再構築」

被災地の復興に向けた取組から見えてくる、持続可能な地域コミュニティの再構築のための課題について、3つのテーマに関わる全国の先進事例に学び、参加者間での研究協議を実施。

第1分科会

「震災復興と防災 ～全国の取り組みに学ぶ～」



コーディネーター
岩手大学教育学部長 **新妻二男氏**



左から、いわてGINGA-NET代表 **八重樫綾子氏**
奥尻町 総務課長 **竹田彰氏**
御蔵通5・6丁目町づくり協議会・まちコミュニケーション
代表理事 **宮定章氏**
黒潮町情報防災課長 **松本敏郎氏**



左から、三陸鉄道 代表取締役社長 **望月正彦氏**
企業組合でる・そーる 代表理事 **澁谷尚子氏**
みやざき公共・協働研究会 **出水和子氏**、**佐藤己実氏**
柏崎まちづくりネットあいさ事務局長 **水戸部智氏**

第2分科会

「地域コミュニティの再構築」



コーディネーター
全国コミュニティ・スクール連絡協議会長
貝ノ瀬滋氏

第3分科会

「学校・家庭・地域の連携と絆づくり」



コーディネーター
宮城教育大学教育復興支援センター
副センター長 **野澤令照氏**



左から、野田村立野田中学校 校長 **藤岡宏章氏**
田辺市教育委員会生涯学習課長 **三栖隆成氏**
同 学校教育課長 **木下和臣氏**
しのはら地域教育協議会 地域本部長 **長島由佳氏**
篠原中学校教諭 **杉崎琢氏**
ハリウコミュニケーションズ(株) 専務取締役 **菊池淳氏**

第1分科会「震災復興と防災 ～全国の取り組みに学ぶ～」 コーディネーター 岩手大学教育学部長 新妻 二男 氏

いわてGINGA-NETプロジェクトの取り組み <岩手県>

パネラー いわてGINGA-NET 代表 八重樫 綾子 氏

- ・ 発災後、数カ月間を経て、全国的には早くも支援に対する意識が遠のいたという意識があった中で、いわゆる内側にいる私たちがつなぎ手として多くの学生ボランティアを被災地の支援ニーズとつなぎ取り組みをしていこうということが、いわてGINGA-NETプロジェクトの試みにつながった。
- ・ 災害ボランティアセンターの運営支援や応急仮設住宅の談話室でのサロン活動に取り組む一方で全国各地、岩手県外、主に東北よりも西の地域で、何とか支援活動に行きたいけれども、自分たちの力だけではどうにも東北の地に入れないという学生たちの多くの声を聞いていた。
- ・ 学生ボランティアとして、なかなか現地の様子が見えないこと、資金面の問題、移動手段や滞在場所の確保が難航していたという現状を知り、そのために私たちができることはということと考えたのが、「いわてGINGA-NETプロジェクト」。
- ・ 当初、8月と9月の大学生の夏休みに当ててこのプロジェクトを始動した。住田町の廃校で200人の学生が寝泊まりをして共同生活をするといった、本当にチャレンジとしての試みであった。バスで沿岸地域に1週間通って、拠点に戻って一緒に振り返りをしたり、翌日の準備をしたり、オリエンテーションを行ったりという取り組みを2011年の夏に始め、春休み、冬休み、夏休みという年間に3回、この夏で全7回実施。
- ・ 徐々に被災地域の様子も変わってきており、現在は、ワカメ、昆布漁の手伝いを漁師と一緒にしたり、沿岸地域さまざまな場所での学習支援にも学生ボランティアを派遣している。
- ・ 成果として、学生自身がさまざまな気づきを得て、地域に元々あったよさや風土、伝統的なものを感じ取って帰ってもらうことは、岩手の被災地のこれからの活性化に効果的である。
- ・ さまざまな情報を人から見聞きするだけでなく、実際に地域に足を踏み入れて声を聞き、地域の様子を知り、自分たちにできることを試行錯誤の上で実現した活動は、本当に地域で必要とされることに結びつく。地域の方がかなえない夢や思いを私たちが必要な範囲でサポートし発信していくことが重要。

復興まちづくりと自主防災組織 <兵庫県>

パネラー 御蔵通5・6丁目町づくり協議会・まちコミュニケーション代表理事 宮定 章 氏

- ・ 僕がいる御蔵地区は310世帯、200m×200mの地区。今、18年目で、建物やインフラはきれいになったが、下町にいた人がどれくらい戻ったかを調べた。町は8割焼けて、神戸も土地をいじるので3年間建ててはだめだということだったのだが、自力仮設といって、その場に73軒が建った。実際はほとんどその時建てた方しか戻ってきていない。33軒戻ってきているのだが、全部住宅。工場、店舗がたくさんあった下町だが、それらがほとんど戻ってこなかった。まちはきれいになり人口が戻っただけで、神戸の経済はなかなかもとに戻っていないのが現状。
- ・ 僕たちの団体は、まちの復興なくして復興はないと。みんなが戻ってきて暮らすまちができないと復興はないということで、地元の住民と東京から来た大学生や、アルバイトなどで作った組織。
- ・ 専門家に、素人がかかわるものではないと言われたが、わからない分住民と一緒に悩めるというか、わからなければ、あそこへ行って聞いてみよう。すると、意外とできることもあり、僕らは結構それで役立っていると思っていたが、15年目に言われたのは、何もできないことは知っていたが、ただそばにいてくれるだけで心強かったと。
- ・ 地元の事業者の協力で、そこに来れば、まちづくりの情報がわかるという拠点をつくった。地元の方がまちづくり協議会をつくったので、それを運営するという形とした。まちづくりの情報のニュースの発信や、勉強会の開催。
- ・ 素人ながらに住宅のコーディネートもした。勉強会や、土地の集約にボランティアながら関わった。地元の方が関わると、利害関係者があり、第三者として進めた。この地区にできている公営住宅はいつ建つかというような情報も発信した。先にできた公営住宅にみんな入りたい。確約があれば待てるが、神戸の場合確約はされていなかった。先にできたところからどうしても入りたいというので、そのコーディネートをかなりした。
- ・ 地域に人が戻るのには、簡単なことではないということ学んだ。人がまちにいないと、商店も戻ることができない。また、市街地では、この東北でもそうだが、そこに入れるかどうかという情報のやりとりが非常に大切になってくる。時間がたつにつれ、別の場所で再建されたりというようなことが起こってくる。
- ・ 次の災害に向けて神戸も真剣に考えないといけない。人と人とのつながりを大切に、できることは自分たちですること、新しい住民との交流や、高齢者の見守り、地元の方が地元の方を支えることに取り組む。人が住みたくなるまちを目指さなければ復興はない。地元をよく知る方々に声をかけながら、まちづくりを今も模索している。

津波被害から復興した奥尻島が伝える「心の島チカラ」<北海道>

パネラー（北海道）奥尻町 総務課長 竹田 彰 氏

- ・ 奥尻は復興、復旧計画の中で20年たったら過疎の町になったと言われる。そうならないように復興計画をつくるべきだと言う方もいる。しかし、町としては70歳や80歳の人でも被災をしており、この人をどうするかなのである。20年後に空き家になることも漁業ができなくなることも当然わかっている。だが、農業、漁業をやっている人は、サラリーマンと違って、体が元気なうちは働く。それならば、逆に亡くなるまで働いてくれと、こういうやり方。おじいちゃん、家建ててくれと。おじいちゃん、何とかあと20年漁師やってくれないかとも言う。その後、当然天国へ行って空き家になるが、それはそれでいいと。とにかく島の中で生活して、島の中で死んでもらいたいと、島の中で家を建て、島の中でなりわいをしてもらいたいと、こういうやり方のまちづくりをした。
- ・ 5年前から、函館ラサール高校の新入生が奥尻町で2泊3日で防災教育を行っている。自分たちでプログラムを組んで、自分たちで実践するというものだが、行政も全面協力をする。消防車を出す、消防団員も出す、それから救急車も出す、防災行政無線も鳴らす、それから会館で毛布も出して、雑魚寝で1日間の体験、それから歯を磨かない、朝起きても歯を磨かないというのはどういうことになるのかとか、トイレが避難所の場合どういう状態になるのか、そのときに何が必要なのかとか、そういう実践訓練である。加えて自分たちで炊き出しもする。
- ・ このプログラムの中では、口から入れるものよりも体から出すものが大事だと。例えば排泄を我慢して体調を壊す人、口内殺菌をしないことによって肺炎などを起こすお年寄りも出ることも言う。それと、命を助けるというのはどういうことかということも新入生に説明する。私たちの目指す防災教育は、実際の事象。例えば想定外の災害を受けたシミュレーション。それがラサール高校にすごく刺激的になって、今はインターネットなどによる発信によって、全国から照会もあり、毎年修学旅行を兼ねて奥尻に来る。
- ・ 奥尻町はそういう場合は必ず行政も職員も、みんな一生懸命バックアップする体制になっている。子供のときに災害を学習するとか模擬体験することは、大人になっても忘れない。東北は、これから防災教育という名の大きな発信場所になると思うので、とにかくダイナミックな発信をしてほしい。

南海トラフ巨大地震に備える <高知県>

パネラー 黒潮町情報防災課長 松本 敏郎 氏

- ・ 昨年の3月31日、内閣府中央防災会議から、黒潮町に日本で最も厳しい数値が示された。最大震度7、最大津波高は34.4m。しかも、高知県には最速2分で津波が到達する…
- ・ 住民から諦めの声広がった。もうどうしようもないだろうと。逃げてもしゃあない、逃げないという声。その諦めに背筋が寒くなるほど恐怖感を味わった。
- ・ 町長の指示は「防災思想をつくれ」。国のデータでは、何も対策はできない。これからさまざま情報が出てくるが、多少のことではぶれないような思想をつくれというもの。
- ・ 東北被災地の調査から帰ってつくった思想の基本は「避難を放棄する者は絶対出さない」こと。これが私たちが見つけた思想の柱。そして、町民全員で「あきらめない。揺れたら逃げる。より早く、より安全なところへ。」という言葉を共有することとした。
- ・ 具体の取組として、避難所を最大数値に合わせないこと。安全度を分けて避難所を整備する。それから、高台移転も将来検討する。そして、車両避難についても徹底的に検討する。決して思考停止をしない。全ての職員200人を防災担当にすることなどから始めた。職員研修をまず徹底的に実施、そして職員が地域へ入っていくと。地域ではワークショップをする、そしてフィールドワークを通じて地域の実際の脆弱性を調査を実施してできたのがこの地域の脆弱性の診断図である。
- ・ 1年間で300回のワークショップをしながら、戸別の津波避難カルテも作成。防災隣組の項目も設け、事があったときは、近くの人しか当てになりませんよと。ふだんいくら仲が悪くても、災害となると近くにおる人、特に声が届くぐらいの方が一番力になると言っている。
- ・ 黒潮町南海地震津波防災計画の基本的な考え方の第一は「覚悟」いかなる困難な状況に直面しても諦めない。ふるさととは、次の世代へしっかりと引き継いでいきますという覚悟。
- ・ 既に日本一の危険な数値が示された町への風評被害は始まっている。低い浸水区域では、土地がなかなか動かなくなっているし、修学旅行も、危ないから行かないということも出てきた。震災の前に過疎が起こる心配。
- ・ これに負けない活動が必要。一つは、34.4mを逆手に取ったブランド、つまり備蓄の缶詰を開発。決して負けないたたかたでしなやかな発信を持って、これから現実的な取り組みをやっていききたい。

第2分科会「地域コミュニティの再構築」

コーディネーター 全国コミュニティ・スクール連絡協議会 会長 貝ノ瀬 滋 氏

三鉄で巡る！地域復興にむけたまなび <岩手県>

パネラー 三陸鉄道 代表取締役社長 望月 正彦 氏

- 三陸鉄道は、昭和55年の国鉄再建法を受けて、国鉄が分社化、民営化に向けて動き出し、県と沿線市町村が協議して、地元でやろうということのできた国鉄転換第1号の第三セクター。昭和59年4月に開業した。昭和59年に運行したときは、地域の皆さんは大喜びだった。高校にも通える、買い物にも1時間で行ける、1日がかりの通院が1時間で行けるようになったということで、大盛況だったが、その後、マイカーの普及、道路の改良、高校生の数が30年前に比べて半分になったことなどで、平成6年以降ずっと赤字という状況。
- 赤字だから要らないという声は、余り出てこない。なぜかという、やはり生活の足であり観光客がたくさん来るということ、三陸鉄道は、赤字でも必要だと言われる、そういう会社。もちろん会社も努力してきたが、なかなか赤字にはならないという状況の中で震災に遭った。
- 震災の2日後、3月13日、現地を見に行き、その日の夜、部分復旧させるということを指示した。15日から軌道整備、運転再開準備作業をし、整備が終わった順に、久慈～陸中野田の11.1キロ、宮古～田老12.7キロ、田老～小本12.4キロ、3月に36.2キロで運行を再開、その後全部で107.6キロのうち、3分の1の区間で運行再開。
- いろいろ食いつないできた中で、国の全面支援が決まり、鉄道・運輸機構の全面協力をいただけることになり、復旧に動き出した。一次復旧は去年の4月、陸中野田から田野畑駅間、ことしの4月3日に南リアス線の盛から吉浜、来年の4月上旬には、残る田野畑、小本間、吉浜、釜石間を全線で運行再開するという予定。
- いろいろ課題はある。震災復興の遅れ。駅の周りに家がないところがいっぱいある。まだ堤防もできていない。堤防ができて、土地のかさ上げをして、それからまちができる。まだ数年はかかる。
- また、JR山田線、宮古から釜石55.4キロあるが、どうなるか決まっていないことが1つ。それから、震災によってますます過疎化、少子高齢化、つまり人口減が進むだろうということの心配。さらに、高台移転が進み復興道路もどんどんよくなりモータリゼーションが進行する。これにどう対応していくか。
- 対応として、交流人口の拡大をしていこうということで、観光客にもどんどん来ていただきたいと思っているし、震災学習とか教育旅行、研修旅行、こういったものを積極的に呼び込みたい。
- コミュニティーという面で言うと、駅を中心にしたまちづくりを進めることを沿線の市町村にお願いしている。今までのまちづくりは、車中心のまちづくり。お年寄り居場所がない。駅をにぎわいの場にしようと、宮古市役所を駅のそばに持ってこられないかということで今検討しているし、小本駅などでは駅を中心としたまちづくりを進めている。駅ビルをつくり、中に役場の支所、診療所、集会施設をつくって、バリアフリーにして、駅に人が集う仕組みをつくらう。地域の生活の足の確保とその地域の活性化に貢献していこうと考えている。
- 鉄道の持つ優位性である、安全、安心、定時性、速達性、たくさんのお客さんを運べるというものは、地域の貴重な財産。私どもは、これを生かした取り組みを地域と一緒に進めていくことによって、地域の産業振興、活性化に貢献していきたい

人と人とのつながりの再生による地域の助け合いネットワークづくり <宮崎県>

パネラー (一社)みやざき公共・協働研究会 出水 和子 氏 佐藤 己実 氏

- 地域での防災・まちづくり教育を基本にした地域コミュニティーの再生事業をみやざき地域再生協議会で取り組む。市、大学、研究センター、県社協、NPO、企業、私ども一社)みやざき公共・協働研究会と県民がつくる宮崎防災ネットワークという構成メンバー。
- みやざき地域再生協議会の事業内容。防災カフェの設置及び移動カフェ、試験的常設カフェを設置し、防災・まちづくり教育講座を実施。講演会に足を運ばれる方は非常に少ないので、防災何でも相談など、いつでもどこでも誰でも参加できる取り組みに。
- 常設カフェ。いつでも来られる場所、高齢者が立ち寄りやすい場所、お話をゆっくりできる場所、防災のちょっとしたこと何でも聞ける場所、多様な交流ができる場所になっている。
- 東日本大震災以降、個人や家庭での備え、自助と防災、地域防災、共助についての関心が高まっている。災害に強い地域協働コミュニティーづくりを目指す。地域主体の行事として、日南市東郷地区の防災講習会、生涯学習フェスタin東郷を実施。小中学生、地域住民と避難訓練、講演会、図上訓練も実施。
- 地域の中で大きな役割を果たすであろう高校生への働きかけが弱いという新たな課題を受け、高校生対象の研修講座として災害時において何があってもまずは自分の命を守り抜く自助と、みんなで協力し合って救助に当たる共助について体験と訓練を行い、地域防災の担い手を育成することを目指して実施した。そこにいる人たちと協力して、そこにあるものを使って何も無いところから研修、体験、発表、課題を抽出、次回へ向けての提案を高校生みずから行う。
- 防災まちづくりベーシック講座として小5を対象に全3回の課程を修了した小学生に子ども防災博士を認定した。202名の子供防災博士が誕生した。彼らの取組として5年生が防災かるたを作成。子供たちが地域防災を発信するすぐれたリーダーとしてかたるづくりに取り組んだ。
- 取り組みの中から生まれた防災ツールとして、地域の社会福祉協議会と一緒に福祉防災の手引を開発。地域住民2万1,353人を対象に意見交換会と図上訓練で課題や提案を抽出、その成果を地域の代表者、地域の企業、地域の福祉関係のグループなどが集まって防災の手引を完成させた。
- 地域のつながりや地域の課題が防災を切り口に見直された。地域の多様な主体、自治会、学校、福祉、行政、企業がともに地域防災に取り組み、助け合いのネットワークが生まれ、強化された。各地域での取り組みは現在も継続し、発展している。地域の再生は、地域に暮らす人たちと助け合いのネットワーク、人と人とのつながりのみずから行うものではないだろうか。

女性のコミュニティビジネスによる地域活性化〈青森県〉

パネラー 企業組合でる・そーる 代表理事 澁谷 尚子 氏

- ・ コミュニティカフェでる・そーれ。青森県の津軽鉄道の本社の建物の1階でカフェを営業。青森県の西北地区は産業が低迷しており、少子高齢化が進んでいる地域。
- ・ 立ち上げるきっかけは県の企画調整課の事業で、絆で結ぶ地域がつながるモデル支援事業。ソーシャルキャピタルの考え方を実践でやってみよう。地域の中でできずなが強ければ、その地域は活性化する。具体的に言うと、地域のお祭りなんかをやっているところなんかは、人々のつながりがすごく密なので、例えば誰に何を振ればすぐ事ができるかというのがわかっていると。だから、あれをやろうと誰かが言ったときにすぐにできるというのは、その地域の人たちが密につながっているからだ。そういうことを広い地域でモデル事業的にやってみようというもの。
- ・ プロジェクトチームを3つ立ち上げた。駅前販売プロジェクトチーム、津鉄の沿線の資源を活用したプロジェクトチーム、農産物加工プロジェクトという3つ。この「駅前販売プロジェクトチーム」が後にでる・そーれとなった。
- ・ でる・そーれは、軽食の提供、お土産の販売などをやっているが、ターゲットは半分は地元の人、半分は観光客。地元の農家からシャモロックとか地元のを仕入れ、働く人たちは雇用する、地元の情報発信とか交流の機会を与えるということ。でる・そーれは、商品開発、コーディネート、PRをする。でる・そーれが自立して、奥津軽全体を商品にして考えていこうと考えている。
- ・ 企業組合にしたのは、1年半後。加工会社と契約することで法人格が必要になり、自分たちが働くところは自分たちでつくるという考え方で企業組合の形をとった。
- ・ コミュニティーとしての場の活用だが、もともとただの飲食店ではないということで、最初の年からいろいろなミニコンサートをやったり、地域の人たちのいろんな講座を開いたりしている。また、でる・そーれ農園もやっている。観光的・体験的な農園、それを地元の農家さんと協働してやっているもの。さらに高校生のまちづくりクラブとか、それから弘前大学の就業力育成事業の受け入れもしている。
- ・ 私たちは何のためにこの事業をやっているのかということを考えたときに、結局幸せは何だろうかということと一緒に探していく仲間をどんどん増殖してきているのだと思っている。地域の中だけでなく、外の人と一緒に交流することによって、中のよさもわかってくるということを実際に体験している中で思った。5年目に入って、地域にあって当たり前な場所になりつつあるでる・そーれ。

柏崎市を元氣な町へ～地域コミュニティづくりや商店街の復興～〈新潟県〉

パネラー (特非) 柏崎まちづくりネットあいさ事務局長 水戸部 智 氏

- ・ 中越沖地震の被災地域の復興を支援しようということで立ち上がったのが中越沖復興支援ネットワーク。最初は僕1人から始めた。ミッションは、被災した地域のそこに住んでいる市民の方々が主体になった復興活動を応援しようということ。まちづくりを応援する組織というイメージ。フェーズとしては3つ。1～2年は、地域が非常に疲弊している中、元気づけだったりにぎわいづくり、コミュニティーの再生の支援活動が主。3・4年目に再生の取り組みを自立に向けて支援していくというフェーズに入り、5年目以降は平時のまちづくりの中で支援をするという大きなフェーズが描ける。中越沖地震の場合は大体5年ぐらいで復興のめどは立った。
- ・ 特に被害の大きかったえんま通り商店街の復興支援。地震直後から商店街の皆さんが会合を開くようになり、まちづくりの会という名前をつけて、行政と地元の大学の専門家の支援をいただいていた。
- ・ 商店街では、大体毎週のように例会を開き、ワークショップで意見を集約していった。その中で、地震から6カ月後ぐらいに復興ビジョンという形で復興の方向性をまとめて、まちづくりの会から復興協議会という名前に変更。復興を推進する体制を整えた。
- ・ 合意形成の部分では全体的にワークショップをしながらまとめていった。大判に印刷した商店街の上に、どういった機能を商店街のどこら辺に設置したいかということ意見を交換して、どんどん旗を差していくようなワークショップ。その後、模型等にビジュアルで見える形につくり込み、CCDカメラで目線の高さで映写するという手法で復興の計画をまとめた。住民の方がみずから模型上でまちを再現していくというような取り組み。
- ・ 商店街全体でやると意見がまとまらないので、大体6つぐらいのグループに分けて意見交換をした。うちは建てかえたいとか、うちは商店街から出ていくとか、いろんな意見が出る。まとめていくと、方向性が似たような人たちが集まってゾーンをつくることができた。それをもとに、共同で建てかえをしたりということをどんどん進めていくという流れになっていった。
- ・ 勝手に好きなような建物を建てると、町並みがなかなかまとまりがなくなってしまうので、みんなでガイドラインをつくることにした。〇×の旗を持って、いろんな商店街の町並みを見てもらいながら、これはえんま通りらしいとか、これはよくないなというのをマル・バツで示してもらうというワークショップ。実際に外壁の色だとか、屋根の形状なんかもみんなで話し合っただけでまとめた。
- ・ ガイドラインとして、建物の高さを高くし過ぎない、勾配屋根を積極的に取り入れる、駐車場をなるべく店の前に設けない、お客さんが来やすいような雁木空間をつくらうというような意見の集約も行った。中庭をつなげて裏路地のように回遊できないかというような計画等も出た。
- ・ 地震から大体6年ほどたっているが、えんま通り商店街だけはまだ復興の途上にある。有志の方々と支援団体等で合同会社をつくって、テナントが入れるような建物も整備している。
- ・ 平時のまちづくりに少しずつ変遷してきていて、団体の活動を支援するような団体が引き続き欲しいという地域からの要望があって、法人化して、こういった支援活動を続けている。

第3分科会「学校・家庭・地域の連携と絆づくり」

コーディネーター 宮城教育大学教育復興支援センター 副センター長 野澤 令照 氏
「復興教育」を中心とした地域を巻き込んだ活動 <岩手県>

パネラー 野田村立野田中学校 校長 藤岡 宏章 氏

- ・ 今、野田の子供たちは、「私たちが野田村の太陽になる」ということを合い言葉としながら、昨年からさまざまな取り組みをしている。子供たちの心のよりどころになっている言葉を受けて本校職員は、そのために一生懸命支援しよう、野田村の太陽にさせてあげようよというようなことを合い言葉に我々は頑張っているところ。
- ・ 復興教育を進めるに当たり、これまで以上に地域社会とのかかわりということを強く認識するということが必要。県ではいわて型コミュニティ・スクールを全ての学校で進めているが、改めてコミュニティ・スクールのあり方ということ学ぶ機会になった。
- ・ ただ、残念ながら、コミュニティーが壊れている部分もあり、それをどう再生していくのかという裏の動き、自治体の動きと学校とのかかわりということがこれからまだまだ続く大きい課題。
- ・ 現在復興のための予算というのがたくさんついている。中学生であっても、予算がどのように使われているのかを学ぶ大事な機会であり、社会科の公民の時間から総合的な学習の時間へスライドする形で村への参画を進める取り組みをしている。
- ・ 三重防潮堤をつくらなければいけないよねという提案を中学生がしている。これを村が取り上げ、実際に3つの防潮堤をつくるという方向で動いている。加えて防潮堤と防潮堤の間をうまく活用できないかという提案を既にそのときの中学生がしていて、そこを公園にしようということでその公園の設計を、設計コンサルタントの方に入っていたいてワークショップをしている。復興まちづくり計画というものを実際に大人の方々の資料をいただいて中学生も勉強し、その中でどういう公園が望ましいのかという形で参画をしていくということ。実際に6つに分かれる公園の中の、1つのゾーンを中学校がいただいた。そのゾーンの中にどういう木を植えるのか、どういう遊歩道をつくるのかということを具体的に設計し、より具体的な部分を考えている。
- ・ 村の当局では復興村づくり計画と防災マップを全戸配布している。これを中学生がしっかりと理解し、自分たちで考えてみようという防災学習の中にこれを取り入れ、中学生目線で村がつくった防災マップの検証をする取り組みを行った。自分の地域を回らせて危険箇所をチェックさせた。さまざまな自然災害を考えると、海沿いだけの問題ではないという認識を子供たちは持ち始めている。村の防災マップを拡大したものに書き込みをし、写真を張り、新しいものをつくっていく。
- ・ 子供たちが勉強しなければいけないのは、いろんな場所にいたときにいかに状況を的確に把握するか、そして適切に判断して行動するかということを学校教育の中で地域と一体となって考えていく必要がある。
- ・ より豊かに、より深く広く学ぶためにはどうすればいいか、学校は学校の中だけで教育をする時代ではない。地域の方や、専門家の声を聞いて子供たちが学ぶということが続けていきたい。

防災共育～共育コミュニティを基盤とした地域防災～ <和歌山県>

パネラー 田辺市教育委員会生涯学習課長 三栖 隆成 氏 同学校教育課長 木下 和臣 氏

- ・ 国の中央防災会議では、南海トラフの地震が起きた場合、15分で最大12メートルの津波が当地方を襲うという想定が出されている。台風の通り道でもあることから、沿岸部では地震、津波、山間部では水害、土砂災害といった、それぞれの場所によって異なる自然災害に対応することが必要。
- ・ 市では、4地域に共育コミュニティ事業を展開。23年度から25年度までの3カ年の文部科学省と和歌山県の補助。
- ・ 小学校では、地域住民と一緒にデジカメを持って危険箇所、避難ルートの確認を行い、住民と一緒に防災マップをつくった。地図にそのデジカメで撮った写真を落とし込み、ここは危ない、ここは例えば地震で揺れたら塀が倒れてきて、避難ルートになっているのだけれども、無理だということとか、いろいろ子供たちなりに考えて取り組んだ。マップはA3サイズに印刷して、全戸配布。避難訓練は、高学年は園児の手を引いて避難、それから低学年は自分の身を安全に守って校舎の屋上へ逃げ、高台へ二次避難、地域一丸となって防災訓練。
- ・ 終戦すぐの昭和21年の12月21日に昭和南海地震が発生、田辺の死者46名うち26名が新庄地域で亡くなっているが地元の新庄中学校で「新庄地震学」を平成13年に始めた。各教科では、国語では防災の標語、社会で、数学でとそれぞれの教科で防災の視点を取り入れたメニューを組んでいる。
- ・ 例えばかまどベンチの作成、防災マップ作り、防災ダンス171（NTTの伝言ダイヤル171を覚えてもらうため、中学生が防災ダンスをつくり振り付けをして幼稚園等で披露する）、避難体験、夏の暑いときに泊まったりとか、安否札をつくって各家庭、全戸に配布したりとか、いろいろとやっている。
- ・ 3.11は、和歌山県にも大津波警報が発令され、新庄中体育館に避難した。中学生が自主的にお年寄りに声をかけたり、非常食を配ったり、主体的に動いた。これは新庄地震学の日ごろからの積み重ねがあったから。
- ・ 本宮地域共育コミュニティでも平成23年の9月、台風12号により大変な被害があり、田辺市で死者8名、行方不明1名、土石流や深層崩壊の災害があったが、ボートで救出される際に高齢者に避難中に中学生が気遣って話しかける姿が見られた。
- ・ 学校現場では、本年度、各学校に防災教育の担当者というものを位置づけ、子供たちの生き抜く力を育む具体的な実施の方法を今検討中。防災教育担当者会で、沿岸部、中山間部、山間部それぞれブロックごとに防災教育の交流をして最終的に、実践記録集を作成したい。
- ・ 成果として少しずつ地域や学校での防災意識が高まりつつあるが、全ての地域の方々がいろんな取り組みに参加できているというわけではないので、いかに巻き込んでいって、地域における防災教育の格差をなくしていくことが今後の課題になる。そして、災害に対しては意識は持ちつつも、ふるさとに誇りを持つことを大切にしていこう。

人を育てることは、共に育つこと ～三つの柱でつなぐ～ <神奈川県>

パネラー しのはら地域教育協議会 地域本部長 長島 由佳 氏

- ・ しのはら地域教育協議会学校支援地域本部は、平成21年、篠原中学校の地域支援本部として発足。23年には事業を中学校区に拡大した。プロジェクトのメンバーには学校関係者、PTA、地域だけではなく、大学の教授であったりゼミの生徒、企業、例えば横浜マリノスであったり、トヨタオートモール、キッザニア東京等企业も入っていた。
- ・ 始まりは地域の課題を共有すること。今この地域で何が起きているか、人を育てていくためにどうしたらいいのか、地域の一人としてそれぞれが何をしたらいいのか、いずれはそれをネットワーク化するために地域を創造することができるか…。
- ・ 震災から1年後、生徒会の子供たちからの体験しなければ何をやっていいかわからないという声を受け、しのはら仙台プロジェクトというものを立ち上げ、子供たち、若い教職員とともに3日間の仙台を中心とした被災地を訪問するという事業を始めた。
- ・ 子供たちが被災地で話を伺ったりする中で、当たり前の大切さ、日頃の備えの大切さ、そして「つながり」が万が一の行動に役立つという3つのキーワードを見つけ出し、地域へ発信を始めた。例えば防災拠点校での発表、連携している高校の文化祭での発表、幼稚園、小学校の子供たちを対象にした防災に関する事業にかかわるときの発表。
- ・ そして、大人。生徒の思いや行動を受け、教職員が動いた。2013年、一回限りの活動で終わらせるのではなく継続した活動が必要、大人も子供も同じ学びの中で考えなければいけない。自主的な行動と発信が教職員から行われた。
- ・ そして、しのはら仙台プロジェクト2013では仙台市の荒浜にある畑で除草作業や苗つけの経験をした。また、被災者が住むグループホームで横浜で練習した歌を、思いを込めて歌った。
- ・ 震災を忘れず、日頃から備えるためにどうしたらいいのか。2012年、大川小学校を訪ねたときにヒマワリの種を分けていただき、横浜でヒマワリの花を咲かせ、幼稚園やプロジェクトの協力企業などに配付、花を咲かせた。
- ・ 「人材育成」「キャリア教育」「IT」が本プロジェクトの3本の柱。これを連動させながら活動することが大事。例えば図書ボランティア交流会、地域連携のコーディネート、キャリア教育の講演会などに学校支援地域本部が取り組んでいる。これらを通じ、人と人をつなぐことにより、みずからが育ち、地域が生きていく。
- ・ 今年度、生徒延べ200名がボランティア事業をした。新横浜パフォーマンスという祭りがあり、そこで子供たちは販売をしたり、エコステーションの運営をしたり、フリーマーケットの手伝いをしたりの事業に参加した。
- ・ 全ての活動に無駄なことなどはなく、きつとつながる、きつとつなげるがモットー。

学校・家庭・地域・企業が連携した新たな地域づくり <宮城県>

パネラー ハリウコミュニケーションズ(株) 専務取締役 菊池 淳 氏

- ・ 私の教育分野へのかかわりは約20年ぐらい前にさかのぼり、生涯学習ボランティアの支援をするという活動が最初。教員や、社会教育施設の職員向けの研修会・講習の企画、講師などで地域密着型の活動を続けてきた。
- ・ 学校教育とは1996年に高等専門学校、大学のインターンシップの受け入れが最初。その後2005年に経済産業省からキャリア教育の小学校5、6年生向けの教育プログラムを委託を受け、大学生のインターンシップで培ってきた経験を生かし、学校現場の先生方と一緒に実践をしながら関係性を深めてきた。
- ・ 事例を紹介すると、理科授業という社会人講師を派遣する事業、これは小学校5、6年生の単元に合わせて企業や教育センターと一緒に我々がプログラムを開発。社会人講師を理科の授業に派遣していくというもの。
- ・ 学校支援地域本部を知らせるための広報紙、これは教育委員会からの委託という事業で、年5回1万3,000部を仙台市内に配布している。
- ・ さらにキャリア教育として中学生向けの月刊の人材育成情報誌「オガレ！」や津波被害を受けた方たちの仮設とかみなし仮設にお住まいの方たち向けの生活情報誌「震災復興かわら版」を毎月出している。
- ・ 急にこういうことをやり始めたのではなく、震災前から安全・安心であるとか、地域情報、教育情報を広報する目的のマップを印刷業として、学校、地域、行政と共同しながらの仕事をやってきたが、震災以降、地域貢献に結びつく形で事業化できるようになってきたもの。
- ・ 宮城教育大学の教育復興支援センターと一緒にやっている「学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業」の防災の部分を紹介する。
- ・ 4つあるが、1つ目がマップづくりを通して中学生が地域の一人としてできることを考えさせ、学びにつなげる中学校区での取り組み。生徒が毎年入れかわっても持続可能な環境を地域につくることというのを目的に据えた。
- ・ 2つ目。小学校での取り組み、教務主任から、4年生で防災の日の授業をやるのだが、何かいいアイデアはないかと話され、理科実験授業の中に气象台が持っているコマがあって、气象台の座学にフィードワークを組み込んだ事業の案を提供した。
- ・ 3つ目は、公民館と町内会連合会、小学校での取り組み。大震災の町内の記録誌と防災マップ、パンフレット、地域防災管理マニュアル作りにかかわった。
- ・ 最後は、仙台市の防災教育副読本は学校の子供たちと関係者だけで、地域まで渡っていない。これを学ぶ場を地域側にもつくらなければいけないと思っている。そのためには学校の中で開くだけでなく、地域からやりたいこととか困っていることを情報としてどんどん発信していただくことが必要。
- ・ これからは防災教育を支援できる人材の養成、子供が学んでいる学習内容を大人が学べる場づくり、小中学校と家庭、地域、企業の連携をしっかりと継続させるようにつくっていく。それらを今度は汎用性のある形で防災教育の教材とか手法の研究開発もしていきたい。

【2日目】 11月17日(日)

(6) ワークショップ

「次世代へつなぐ、まちづくり・ひとづくり」

第1グループ 「震災復興と防災」

第2グループ 「地域コミュニティの再構築」

第3グループ 「学校・家庭・地域の連携と絆づくり」

パネルディスカッションの各テーマごとに、全国共通の課題である、「学びを通じた新しい社会づくり・地域づくり」について、参加者それぞれの体験や思いを交流し合いながら、新たな学びを体験する場、今後の活動継続のためのネットワーク形成の場としてワークショップを開催した。

【トータルファシリテーター】

参画はぐくみ工房 竹迫 和代 氏

福岡県出身。まちづくり支援業務に携わって20年。現在は神奈川県、東京都を中心にフリーのまちづくりファシリテーターとして活躍中。



【グループファシリテーター】

第1グループ

あおぞら財団

藤江 徹 氏

大阪府出身。大阪の環境NGOあおぞら財団にて、環境・交通・防災まちづくりに取り組んでいる。



NPO法人まちづくり学校

齋藤 主税 氏

新潟県出身。複数のNPOに携わりながら、実践経験に基づく地域づくりのコーディネートを主に新潟県内で展開。



第2グループ

(株)計画技術研究所

岡村 竹史 氏

神奈川県鎌倉市出身。まちづくりコンサルタント。地域環境、地域経済、地域社会、地域経営の観点から地域力の向上を支援。



(株)計画技術研究所

西原 まり 氏

東京都出身。まちづくりコンサルタントにて、東京を中心にまちづくり、都市計画の支援業務に携わる。



第3グループ

まちネット育ちの種

川島 崇照 氏

新潟県出身。キャリアデザインやチームビルディングなど、新潟県内を中心に個と集団の育成・支援に取り組んでいる。



江戸川総合人生大学

高木 理恵 氏

東京都江戸川区出身。介護福祉士として地元を自転車で走りまわる日々。地元を愛し、みつめ、時にくすぐる。



ワークショップタイトルを『次世代へつなぐ、まちづくり・人づくり 知識創造ギフトセッション』として進めました。前日のパネルディスカッションのテーマを基本として、ワークショップで話し合いを深めるため、前日と同じ分科会からのスタートとし、パネルディスカッションのコーディネーターとパネラーの方も参加していただきました。

全体進行・調整

岡村竹史((株)計画技術研究所)

第1分科会「震災復興と防災～全国の実践に学ぶ」

藤江 徹(あおぞら財団 事務局長) 西原まり((株)計画技術研究所)

第2分科会「地域コミュニティの再構築」

齋藤主税(NPO法人まちづくり学校 副代表) 川島崇照(一般社団法人まちネット育ちの種)

第3分科会「学校・家庭・地域の連携と絆づくり」

竹迫和代(参画はぐみ工房 代表) 高木理恵(江戸川総合人生大学)

第一セッション(各分科会)

オープニングタイム

(ワークショップの趣旨説明、ワークショップ
流れの確認、チーム内自己紹介)

② チームの表札(テーマ)づくり

* 表札とは、話し合いたいグループ毎の
「テーマ」

③ 表札への私のひとこと



- 各分科会受付で渡された「カード」により、無作為に4人のチームを構成しました。またカードには役割分担も明記され「ホスト」「国内留学」「海外留学」(国内留学のみ2名)の役割も決定しました。
- 分科会担当ファシリテーターから前日行われた「パネルディスカッション」の概要について、ワークショップの趣旨と流れについての説明後、チーム内で自己紹介を行い、各チームの「表札」をつくりました。「表札」は分科会テーマに基づき、チームで話し合いたいテーマを「表札」とすることで、参加者の抱えている課題を明らかにしていききました。
- チームの合意により「表札」が決定後、チーム内で「表札」について自分の意見(アイデア、問題意識、現状の実態等)を付箋に記入し、紹介しあうことで、チームの話し合いたいテーマについて焦点を明確化していききました。



第二セッション

①ギフトタイム(他のチームのテーマで語り
合い)

②自分のチームに戻り、表札に関する話し
合い

③発表チーム決め

ギフトタイムでは「ホスト」はチームテーブルに残り、「国内留学」は同じ分科会の他のチームテーブルに、「国外留学」は他の分科会会場のチームテーブルに分かれました。「留学生」移動後、簡単な自己紹介をし「ホスト」から「表札」と付箋について説明を受けました。説明を受けた後、「留学生」は移動先の「表札」について、自分の経験知から自由に口頭で発言したり付箋を書き込んだりして、新たな意見を出す(ギフトする)ことで「表札」を新たな視点で見直すきっかけづくりを進めました。ギフトタイムが終わった後「留学生」は自分のチームに戻り、「表札」について再度話し合いをしました。他のチームの意見(ギフト)を活用しながら、「表札」について、現段階での見解を1~3に整理して指定された用紙(紙の靴下型)に書き出すことで、テーマへの見解を整理し、明らかにしていききました。全体発表会で発表するチームを立候補で募りましたが、ほぼすべてのチームが立候補する分科会もありました。

全体発表会

①第1分科会より順に発表 * 各チーム1分間で発表。

②クロージングタイム

全体発表会では全員が集合して、第1分科会から発表がありました。発表時間は各チーム1分以内という短い時間でしたが、「住民が主体の地域づくりをしたい!」「地域のコミュニケーションを考えたい」「東日本大震災で被災された方の話を聴きたい」「被災地ニュースタンド(HNS)をつくりたい」「いろいろな世代の人が楽しめる場を作りたい」「岩手県内の復興から若者が働き活躍できる地域にしたい」「人と人をつなげ!」「親が参画した活動を継続したい」「人物金が結集する地域のしくみをつくりたい」「近所で支え合いたい」「田舎で楽しく多様な方が参加できる交流拠点をつくりたい」の11テーマによる発表がありました。クロージングでは、パネルディスカッションコーディネーターの岩手大学教育学部新妻二男学部長、全国コミュニティ・スクール連絡協議会員ノ瀬滋会長、宮城教育大学教育復興支援センター野澤令照副センター長の三氏より、それぞれコメントをいただきました。



【参加者の感想から】

- ・大学に(手法を)持ち帰って、学生同士でもやってみたいと思いました。(20代 男性)
- ・発表を通して、新しい知識や考え方、自分の課題を見つけることができました。(20代 男性)
- ・多くの意見を聞くことができ参考になりました。聞く力が大事という講評が印象的でした。(30代 男性)
- ・他のグループに「留学」して学ぶことができるしかけが新鮮で興味深く感じました。(30代男性)
- ・たくさんの参加者の方と意見交換し、情報を共有できました。他県の方ともつながりができたことがよかったです。(40代 男性)
- ・他県の方と交流しながら、地元の被災状況をお話できたことが有意義でした。(40代 女性)
- ・自分の意見や考え方を出すことができる場であり、また他の方々の実践や意見をうかがうことができたので、とても参考になりました。(60代 女性)
- ・各地の多様な視点についてまなべるものが多く、また進行についてもユニークなものがあり、楽しく参加討論できました。(70代 男性)

【まとめ】

- ・ワークショップの内容について、トータルファシリテーターを中心に複数名のファシリテーターが参加し練り上げることにより、フォーラム趣旨に沿った内容となった。また、トータルファシリテーターが全体を見通したプログラムを作成し、他のファシリテーターと連絡調整役を担うことにより、3会場同じ進行によるワークショップが可能となり、最後の全体交流会もスムーズであった。
- ・前日のパネルディスカッションテーマを基本とした、グループテーマとなったため、同じ課題意識を持ったグループにより、さらに具体的な話し合いのテーマによる討議ができた。
- ・ワークショップにおいてグループ討議方式では、グループ内交流に終始してしまうことや、ワールドカフェ方式ではテーマ追求が不十分であるという課題があったが、今回の手法はグループ討議を基本としテーマを深めることができたとともに、「留学方式」による他のグループとの交流もできたことから、新たな効果的なワークショップの手法として提示することができた。

(7)復興支援ミニライブ

「被災地からのメッセージ」 臼澤 みさき さん



現在大槌町立大槌中学校3年生で、昨年度メジャーデビュー曲『故郷～Blue Sky Homeland～』で「第54回輝く！日本レコード大賞新人賞」等の賞に輝いた臼澤みさきさんのミニライブを開催した。デビュー曲を始め、「希望郷いわて国体」イメージソング「笑顔の賛歌」、「チャグチャグ馬コ」を伸びやかに澄み切った声で歌い上げた。



(8)クロージングイベント

鼎 談 「生涯学習を通じた地域づくり・社会づくり～震災後のフォーラムの取組を振り返る～」

震災後、2011年の東京大会を皮切りに、2012年の東北3県国立大学での開催を経て、岩手大会まで3年間にわたり取り組んできた「全国生涯学習ネットワークフォーラム」の成果を、それぞれの大会に深く関わってこられた3人の登壇者により振り返ると共に、岩手大会を総括し、今後への期待を全国からの参加者と共有した。

(登壇者) (2013年実行委員会 会長)

岩淵 明 岩手大学理事 副学長

(2011～2012年実行委員会座長、2013実行委員会副会長)

大宮 登 高崎経済大学地域政策学部教授

(2012年実行委員会副座長、2013年実行委員会副会長)

貝ノ瀬 滋 全国コミュニティ・スクール連絡協議会長

3年間のフォーラムの振り返り

2011年東京大会

○岩淵明氏 2011年が東京で2012年が東北3県とそれぞれ開催してきたが、まず成果等についてお話しいただきたい。

○大宮登氏 2011年は、岩手大会が予定されていたが、東日本大震災が起きて無理だろうということで、急遽東京開催とした。

当時の状況を言葉で表すなら「混乱と意気込み」。未曾有の大震災があり、一人一人がどのように向き合うのかということ突きつけられたばかりのときの大会であり、急に東京ということで、非常に混乱もあった中、企画、運営、実施を大急ぎでやったというのが記憶に残っている。もう一つの意気込みだが、大震災があったからこそきちっとやらなくてはならないということと、生涯学習の普及を目指したそれまでの「生涯学習フェスティバル」から、生涯学習に携わる人たちの全国的なネットワーク形成を継続的にやるということを目指した、最初の「生涯学習ネットワークフォーラム」だったので、成功への意気込みがあった。

大会テーマとして「学びを力とする3.11以降の地域づくり、社会づくり」を掲げ今に至っている。大会内容では、オープニングの感動を今でも覚えている。石巻市立雄勝中学校の復興和太鼓、タイヤを再利用した復興和太鼓を演奏し、我々に感動を送り届けてくれた。

地域のきずなづくりの第1分科会、防災教育という2つ目の分科会、高齢社会という3つ目の分科会、そしてICT活用という分科会、5つ目が防災ボランティアと若者という5つのテーマを設けたが、今に続く重要なテーマがそこから始まった。特に5番目のボランティアと若者という、そこから初めて学生が大量にこのフォーラムに、この生涯学習関係の企画の中に入り込んで一緒に考えて考える場が始まった。それが第1回目の内容と意義づけであると思う。



岩淵 会長



大宮 副会長



貝ノ瀬 副会長

○岩淵明氏 今回も若者、学生という力がこのフォーラムの中で使われているが、戦略的に入れていこうという意識はあったのか。

○大宮登氏 生涯学習というのは学びの学習であるが、学びの形が3.11以降変わったのではないかと。そのときはそんなにはっきりはしていなかったのだが、現場に出てボランティアを体験する中で学生たちがすごく成長する姿を眼にし、生涯学習というのは、ひょっとしたらそこに一つの大きなヒントがあるのではないかと、防災ボランティアに参加した学生たちを集めた第5分科会の熟議で意見交換をする中で、ああ、これなのではないかというものがちょっとヒントとして浮かび上がったと記憶している。

○岩淵明氏 もう一つ、岩手の山田町から、衛星テレビで中継したのだが、その辺の仕掛けというのはあったのか。

○大宮登氏 次の大会でもICTが目目され、成果を上げたが、地域のきずなづくりであったり、高齢社会であったり、防災教育であったり、コミュニティであったりというそれぞれの分科会の中でICTが非常に有効だということも含めて遠隔地から参加して意見交換をして、東京と山田町の小中学生のやりとりが行われたと記憶している。

2012年 東北3県各大学リレー方式での開催

○岩淵明氏 2011年東京大会に引き続いて、昨年は3大学、宮城教育大学、福島大学、岩手大学とリレー方式で行ったわけだが、貝ノ瀬先生にその大会についてご紹介いただきたい。

○貝ノ瀬滋氏 2012年は、東北3県の大学3校が中心となって全国生涯学習ネットワークフォーラムが行われた。テーマは、一昨年と似てはいるが、「きずなづくり」が入り、「学びを通じたきずなづくりと活力あるコミュニティの形成」とした。もちろん連続したフォーラムであり、2011年を踏襲、発展させた形であったが、まだ震災から1年と少しということで、甚大な被害を受けた中、復興どころか復旧もままならぬ状況の中で、やはりこれは被災地だけではなく、まさに日本全体が一体となってこの問題に取り組まなければならないということで、「きずなづくり」というキーワードを大会テーマとした。

2011年の発展として、若者たちの活力と学びを十分に生かしたフォーラムにしたいということで、分科会を4つつくった。1つがICT分科会、「ICTを活用した21世紀にふさわしい学びの創造」、それから宮城分科会は「つながりを持った教育復興、復興教育と地域創造」、福島分科会は「若者達が活躍する持続可能なまち・地域・社会」、それから岩手分科会は「まちづくりと人材養成」。



3年間のフォーラムの総括を行った鼎談

特色としては、ICTの活用ということについては、災害時には非常に重要なことであり、その当時中央教育審議会の中でICTについての活用についても議論されていたが、現場の先生方が十分にこれを活用した教育が行われているとは言いがたいということで、宮城教育大附属小中に、実際のICTを活用した授業をやっていた。活用の基盤をしっかりとつくってこうという取り組みであった。

もう一つは、これは2011年もそうだったが、「熟議」。話し合いの手法として熟議を取り入れ、かなり徹底して分科会で行われた。**○岩淵明氏** やはり今岩手で分科会をやるといったときに、1つは弱者という視点と、頑張り始めた人と、踏み出せない人をどう扱うかという議論があったように記憶しているのだが、生涯学習の中でコミュニティといったときにどういうポイントがあるのか。

○貝ノ瀬滋氏 強みを持った人もいれば弱みを持った人もいるという中で、ネットワークを組んでお互いに助け合うという、そういう仕組みなり制度づくりということも同時に議論されていくと思う。

○岩淵明氏 もう一つのポイントは、若い人を巻き込むとなれば大学教育があるのではない、あるいは我々大学という立場では学生が大学で学ばない話で、あえて社会とコンタクトをとっていくというところはどういうポイントがあるのか。

○大宮登氏 学びの形ということを再考するべき。例えば学生を現場に立たせ、チームとして色々な活動をさせるプロジェクト・ベース・ラーニングという手法が学生を成長させるという報告が多くあり、不幸な一つの大きな出来事で学生が現場に、フィールドに入って直接いろんな人と出会って活動する中で大きく成長していくという、その学びの形がそこで確認された。活動しながら学び、学びながら成長し、それが地域に住んでいる人とお互いにウイン・ウインになる関係があるのだということのを不幸な大きな出来事の中で確認できた。それは、ひょっとしたら学生だけではなくて、大人もともに学び、コミュニケーションし、感じて成長するという意味で生涯学習にとって重要なテーマなのではないかということが2011年からずっと今日まで継続されていると感じる。

○貝ノ瀬滋氏 特に今の学生、若い人は内向き志向だとよく言われる。例えば国でも今高校生の留学を3万人から6万人に、大学生の留学を6万人から12万人にしたいと倍増計画があり、もっと海外へという試みもあるが、私は必ずしも日本の若者が内向き志向で消極的になって縮まってしまっているということではなく、きっかけをつくってあげれば必ず羽ばたいていく可能性を秘めた存在だと信じる。

阪神・淡路大震災のときもそうだったが、誰に指示されるでもなく、若者たちが数多くボランティアとして活躍した。東日本大震災もそう。若者は非常に大きな力を持っているし、それらを上手に引き出すということが大人側の責任と思っている。

そういうきっかけをある程度意図的につくっていくということも必要かもしれない。非常時は別としても、平時には関係者が意図的にそういう体験の場をつくって、自分の持てる力を発揮しながらその中でコミュニケーション力や、発信を育てていけるのではないかと。若者はその可能性を十分に秘めている。

○岩淵明氏 もう一つ、3地域でテーマ、分科会を分け、1週間ずつずらしながら実施したが、1カ所に集めて3分科会やるのと3地域が時間をずらして別な分科会をやってきたというところのポイントは何かあったのか。具体的に目指したところとその成果というのはどうだったのか。

○大宮登氏 2009年の高知大会のときから始めようと思ったのだが、フェスティバルからネットワークフォーラムに変えるときの大きな点が2つあって、1つは年間を通してやりたいと。大会のときだけではなく年間を通して活動した成果をここに持ち寄って意見交換をしたいという狙いと、もう一つは、生涯学習にかかわる人たちのネットワークをとにかく継続的につなげたいという、この2つのテーマがあった。年間を通して今週は福島でやったら次の週はどこというような形で継続的にリレーでやっていくことによって、ネットワークをつなぐということを実現できるのではないかと議論があったのは覚えている。

2013 岩手大会

○岩淵明氏 今大宮先生がおっしゃった年間を通してというキーワードで言えば、今年の特徴はプレフォーラムを7月に開催し、その後フィールドワークをやって、昨日は学生のメインフォーラムの中での報告会、2月にアフターフォーラムでクローズという流れで計画を立てて、今メインフォーラムまで来たということが一つの特徴ではないか。

もう一つは、さっき出たプロブレム・ベース・ラーニング(PBL)は今、大学としても重要なテーマになっているが、やはり学生がまず自分で行くということ。行って、そこで何が問題かということをも自分で学んで戻ってきて何ができるか、地域のニーズといえばニーズだし、課題が何かということに対してどう貢献できるかということをも自分たちで考えて次にアクションを起こすと。それが十分達成されたか、まだ途中なのかというのはグループごとであったと思うのだが、そういう一連の流れをPBLの中で地域、社会と一緒に考えてみるきっかけとか、我々大学からいうと実証試験みたいなものなのだが、そういうことにトライして大きな成果を上げたことが2つ目の今回の特徴であり成果だと思う。貝ノ瀬先生はどんな印象をお持ちか。

○貝ノ瀬滋氏 プレフォーラムがありフィールドワークがあり、ある意味では若者にとっていろんなことと出会うチャンスがたくさんある。それは同時に人と出会うチャンスも多くあるということで、人との出会いの中で自分自身の活動を振り返ったり、新しい発見をしたりということの中で、一つのコミュニティができていくきっかけになっているのではないと思う。必ずこれは長期的に見れば財産となって残っていくだろうと私はこの成果を見ている。そういう意味では、効率的とは言いがたいかもしれないが、一発勝負とか、単なるイベントで終わらせないという思いから、そういう決意がされているわけで、これは必ずやいい成果があると信じている。

○大宮登氏 こういうフィールドワークでは予定外のことが必ず起きるので、そこで調整して、昨日の報告の中にもあったように、最初のテーマを中止して別のテーマを選んだり、そういう試行錯誤を繰り返して年間を通してPDCAを回しながら話合っていて意見をいただきながらやっていくということは、実際の仕事にもつながるし、自分自身が毎日をしっかり生きるということにもつながるので、今回の岩手の大会が今まで続けてきた形がきちっと設定されていたと実感した。

○貝ノ瀬滋氏 今ちょうど国の教育再生実行会議の委員ということもあり、その立場から言うと、今求められている、大学がCOC-センター・オブ・コミュニティーとして活躍するという期待もあるわけで、そういう意味では岩手大学はモデルとして先頭を切っている。これはやはり一つのモデルであり、ほかの大学も地域にどうかかわって貢献ができるかと、ただ象牙の塔にこもるのではなく、これからの大学のあり方も一つ示しているということであろう。

今後への期待と展望

若者への期待

○岩淵明氏 地域と大学のかかわりは、単なる高等教育ではなく生涯教育、社会と大学を結ぶとか、知識の活用とか人材の育成とか関わるものだと思う。

そういう中で、僕は外から入ってきて生涯教育を見たとき、若者をどうやって呼び込むか。今大きい問題として、学生ボランティアが2年8カ月で延びておらず、どうやって新しい人を巻き込んで継続していくか各大学が抱えている問題だと思う。

だから、やっている人は本当に今でもやっけていても、その裾野がしぼんできているという点に対する何かご助言なりアイデアは何かないか。

○大宮登氏 デザイン・ネットワークス・アソシエーションというNPO法人を10年やっているが学生NPOであり毎年ここに100人ぐらい関わって、人数が減るということはない。それは、彼らがこの活動を通して、自分たちも成長するし、地域の課題を解決に向けて住民とやりとりをする。住民との信頼関係、期待、不安も含めた本当の信頼関係を構築すると、抜けられないというか、継続せざるを得ない。ともに成長する場と活動をつくれれば継続する。それを中途半端にやっていると何となく風化してぼろぼろと抜けていく。

○貝ノ瀬滋氏 ボランティア活動なり社会貢献活動なり、何のためにそれをやるのかという動機づけも必要とは思ふ。必ずしも東京の学生が被災地まで泊まりがけということが全ての学生に可能かという、そうも言い切れない。その気持ち、思いをどこかで生かしてもらいたいという期待を強く持つ。

また逆に、役所や企業が学生を採用するとき、採用の絶対的な条件だと思い込んでいる学生がいるようで、ボランティア活動をやりましたと、それからあとラグビー部で主将をやりましたとかいうものがあると何か企業ではウエルカムなのだというふう思い込んでいる人がいるが、そんな形式的なものではなくて、何のためにという動機づけが大学だけではなく義務教育の段階から必要だろう。

地域への期待

○岩淵明氏 今若者に焦点を当ててお話しいただいたが、もう一つ地域という意味で子供たちに自主的に行きたいとか見たいとかという声を出させる環境というのはやっぱり重要だと思う。なかなか危機感のない地域にとって、どういうふうに広げていくか、お考えがあればお聞きしたい。

○大宮登氏 コミュニティは、だんだん希薄化し、きずなが弱まっていて、いろんな課題がでてくるが、コミュニティをつくるとすれば、やっぱりそこに住んでいる人たちがきちっとかかわり合って強いきずなをいかに一つ一つつくるかということが課題で、これは東京も田舎も同じ。コミュニティの再構築は全国の課題。

それと、対外的に凝り固まっていて、いろんな人を入れないような地域は、これも衰退している。どんなに中山間であろうと、どんな離島であろうと、いろんな人が入りやすい空間、緩やかなきずなをどんどんつくっていくところはいろんなことが起きていて、元気になって、人口が減ったとしても交流人口がふえている。強いきずなをどんな形で個々人の自由を尊重しながらつくるのかということと、そこに住んでいない人たちとのネットワークをいかに大切に広げていくのかというのは、これはどこも同じかなと思っている。

○貝ノ瀬滋氏 防災教育を考えても、まさにこれは全国的な問題。私は校長時代、災害は忘れたころにやってくるのではなく、災害は必ずやってくるのだと言いかえていた。つまり地震にしても、火山の上に我が国ができていくわけだから、地震が起こるといえる可能性は大だし、例えば私が今いる三鷹などは、地震が東京湾岸のほうで起きた場合には90人という死亡人数まで東京都のほうから出されている。こんな予想がされる中、切実感を持ってこの防災教育を私たちは取り組まなければならない。

今は単に地震とか津波とかいう問題だけではなく、自然災害というのは予測できないことがどんどん起きる中、子供たちにも非常に動機づけしやすい指導しやすいこの機を逃さずしっかりと問題を共有させていくことは必要だろう。

今後期待される学びの形

○岩淵明氏 きょう私も第3分科会に入って議論に参加したが、PDCAで言うとPまではみんなまとめるのだがDの段階までいっていないのではないかと。グループで意見交換した場合、こうしたらいいよねというところから進まない、いつも討論が意見交換としては成り立つのだが、Aまでどうつなげていくべきか、お聞かせいただきたいと思う。

○貝ノ瀬滋氏 やはり問題を提起し、1人ではなく複数の人間がその問題を共有しながら、どう解決を図っていくかということの話合いまでいかないと本来ではない。今後も、私は熟議の手法を徹底したほうがいいと思う。問題の解決のため皆さんで話し合いながら一つでも道を見つけ、それを一歩でも一つでも行動し発信することが求められる時代ではないか。

○大宮登氏 ワークショップ、熟議あるいはワールドカフェという手法だが、全国から集まってきて3時間で1つのテーマについて、みんながどんなことを考えているかということを経験交換するという、日ごろ考えていることを話したり意見交換する中で整理したり、あるいはヒントを得たりという場。それを本当にプランニングして実際行動に移すためには、経営資源の人、物、金、情報をちゃんと集めて組織をつくって、いつまでやるかというスケジュールを組んで実際に動かさない限り事業としては起きない。

そのために、今日のような熟議というか、ワールドカフェを継続的に組める人たちが3セットぐらいやると、多分かなりのものが出てくるのではないかと。

今後の生涯学習の展望

○岩淵明氏 3年間通して復興というものをベースに取り組んできたが、課題としては将来生涯学習というキーワードの中にどんなものが存在するか、それをどういうふうに見ていくかという展望みたいところを先生方にお聞きしたい。

○大宮登氏 特に学生を地域に継続的に出すというのはなかなか難しい。私が10年間学生のNPOを続けて、地域課題解決に向けてずっと続けてこられたというのは、ひとつはPDCAをきちっと彼らに意識させて、計画して実施して必ず振り返りをして、次の行動に生かすということを、組織づくりもお金集めも含めてしっかり事業をやるということを意識しながらやっていくということ。

ふたつ目は、今年で終わるのではなく来年も再来年も継続していくということを常に意識させる。活動と継続をあわせてやるということをやっている。継続するときに非常に重要なのが、地域との信頼関係。その地域で何かやるときは、地域の行政の方、区長さん、中高生とかに徹底的にそこの課題を聞くことを通して、地域との信頼関係を徹底的にやるということをやっている。そして、引き継ぎを活動と同じくらい重要だという意識づけをして、学生と地域の人たちとの共同の形をつくること。これらを通して、今、群馬や能登とか京丹後でメンバーはかわっても事業は継続され、成長する形になっている。

○貝ノ瀬滋氏 私は、きのうちょっと所用があり、午前中の富田先生のお話とか、それから学生の皆さんの発表が十分聞けなかったが、聞いたところによると、例えば富田先生は講演の中でわくわく感というふうなことをおっしゃっていたということ、それから学生の皆さんの中で被災地を訪問し、また避難所の訪問の中で、そこのお年寄りが復興は楽しいのよというふうに言われたということであり、まだ復旧道半ばだろうが、少し潮目が変わってきたのかなという感じも受けなくてもない。

つまり前を向いて行こうぜという、機運が出てきているのではないかと思う。やっぱりとにかく前へ前進させるということがこれから求められるのではないか、そうあってほしいなと思う。

ただ、いろんなことで十分ではないことはもちろん承知の上だが、問題提起だけではなくて解決の方向とか光が見える方向へと考えると、例えば被災3県の中でも大きなハンディを背負いながらも、頑張っている人も結構いらっやして、困難な状況の中でも前を向いて何かしらの起業をしているとか、ネットワークをつくっているとか、そういったシード、芽、種というものをどのようにつくったのかという、きっかけをぜひ学びたい。

この会は、被災3県のためだけではなく、全国生涯学習、全国という冠がついているように、これは全国的な問題であるわけで、全国の皆さんがどこも難しい状況は程度の差こそあれ抱えている中で、前を向いて頑張らなければいけないと。そのときのきっかけというか、どうやって突き抜けることができたのかという、そういうポイントを学ぶ企画ができるとすばらしい。

○岩淵明氏 私は、2年間関わってみて、一過性ではだめだと常々思っていて、アクションとしての継続性ととともに、このように集まるという機会をきちっとオーガナイズする継続性、仮に名前が変わったとしても生涯学習について意見交換しながら新しいベクトルとして若者をPBL的な発想で社会とかかわらせていくという継続性が重要で、我々実行委員としてはそれを声高らかにお願いしたい。

もう一つは、日本各地が少子高齢化や過疎化という問題に悩んでいて、その中でどうコミュニティを維持・発展させていくかというのは、これはもう全国共通の課題で、決して復興地域、被災地域だけの問題ではない。そういう意味でこういう議論をしながら、今回北海道から鹿児島までいろんな各地から来ていただいて、意見交換しながら地域に戻ってまたやるという、こういう場というのがひとつ重要で、やはり継続してほしい。

もう一つは、地域が2年連続して学習の場になったことを考えると、こういうものを本格的に政策として具体化していくことが、今後のコミュニティにかかわる人材育成ということでは非常に重要なのではないかなというふうに僕自身は考えている。

(9)ポスターセッション

事例発表団体や、県内外の自治体、生涯学習団体、NPOを中心にポスターを展示。メインフォーラム会場のエントランスホールと、2月のアフターフォーラムの会場に展示、来場者に観覧いただいた。

No	出展団体名
1	いわて高等教育コンソーシアム
2	国立大学法人 岩手大学
3	富士大学福祉・ボランティア研究センター
4	三陸みらいシネマ
5	岩手県立生涯学習推進センター
6	岩手県教育委員会 県南教育事務所
7	盛岡市
8	盛岡市
9	八幡平市
10	紫波町教育振興運動推進委員会
11	葛巻町
12	花巻市
13	北上市
14	遠野市民センター
15	西和賀町
16	奥州市
17	一関市立室根公民館
18	金ヶ崎町
19	平泉町
20	大船渡市
21	陸前高田市
22	大槌町
23	宮古市教育委員会
24	山田町
25	岩泉町
26	田野畑村
27	「久慈市民おらほーる劇場」
28	久慈市民文化会館 アンバーホール
29	二戸市
30	洋野町大野地区学校支援地域本部
31	放課後子ども教室 野田キッズセンター
32	普代村教育振興運動推進委員会
33	かるまい朗読会実行委員会
34	一戸町
35	九戸村



メインフォーラム会場



アフターフォーラム会場

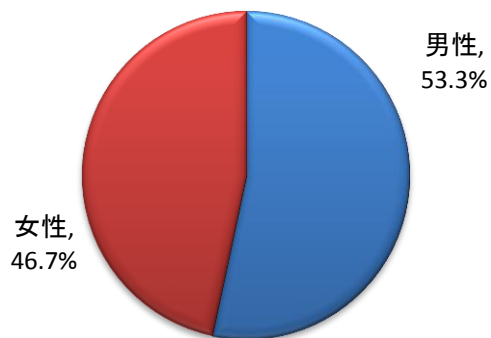
※上記のほかに「大学生支援活動マップ」等も展示した。

全国生涯学習ネットワークフォーラム2013岩手大会 メイン・フォーラム参加者アンケート集計結果

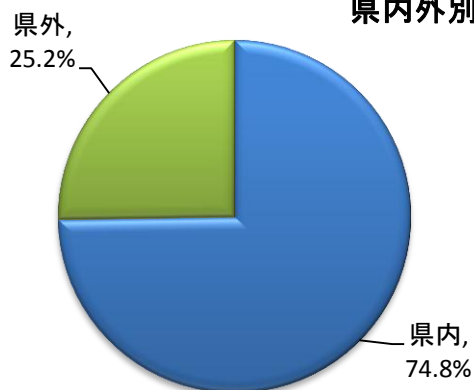
平成25年11月16日(土)～17日(日)

105人の皆様からご回答いただきました。

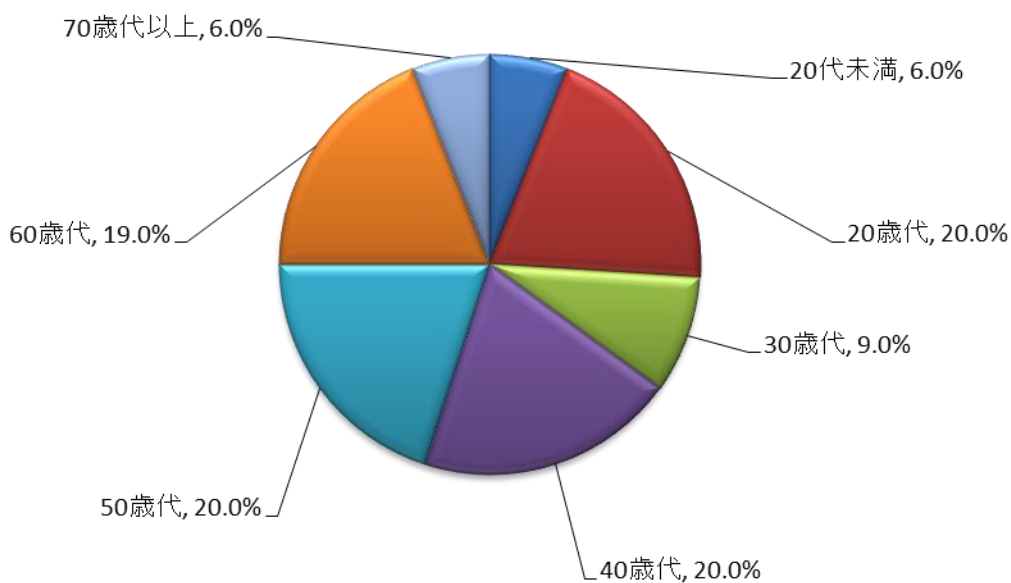
性別



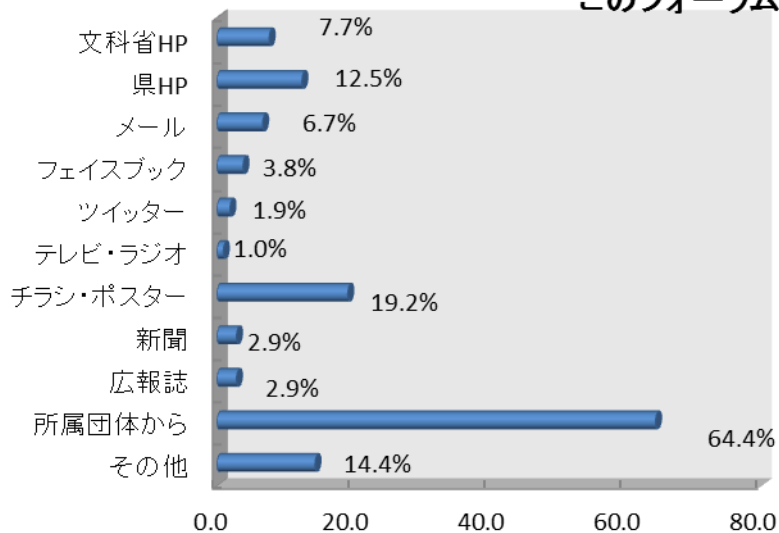
県内外別

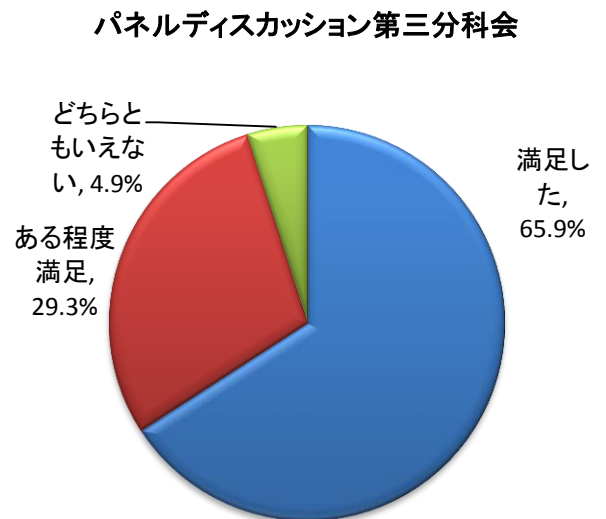
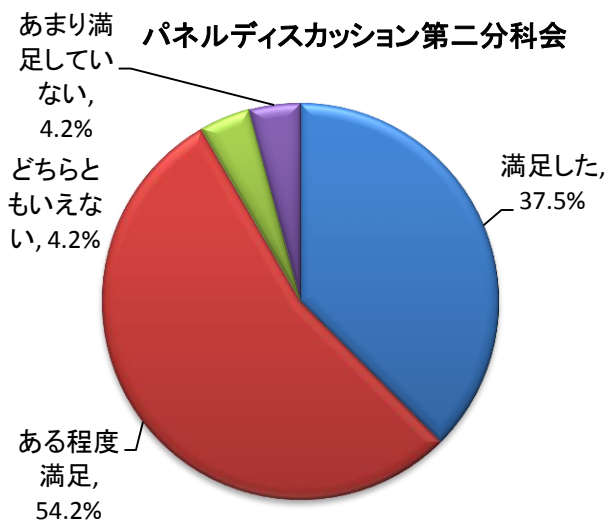
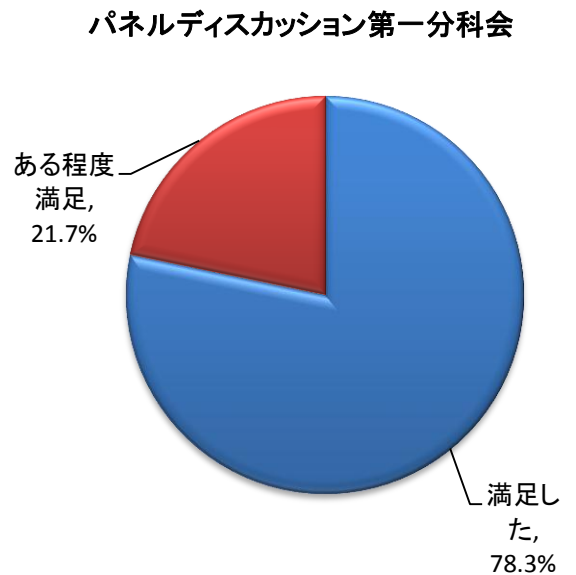
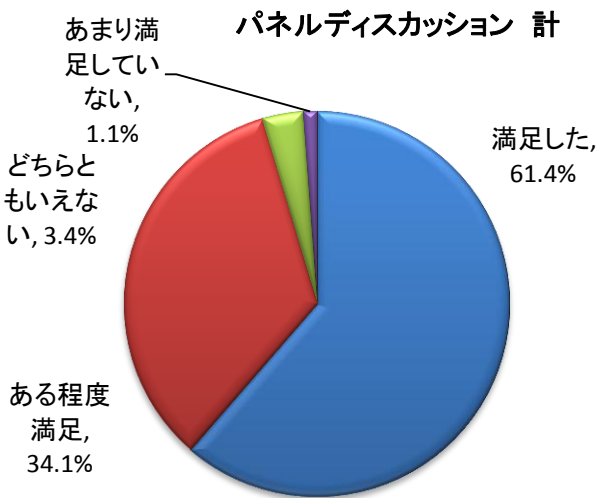
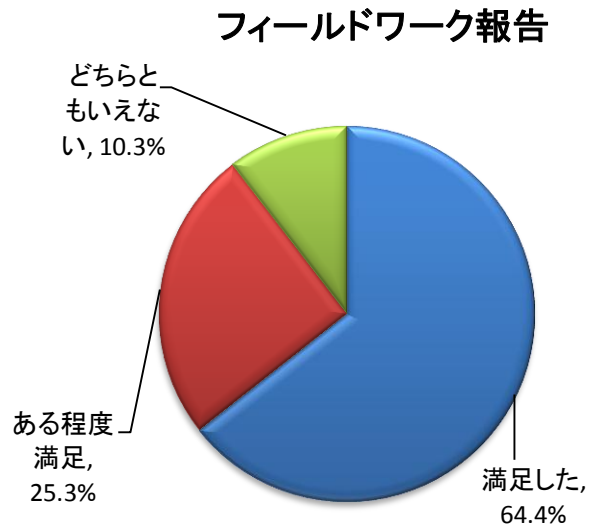
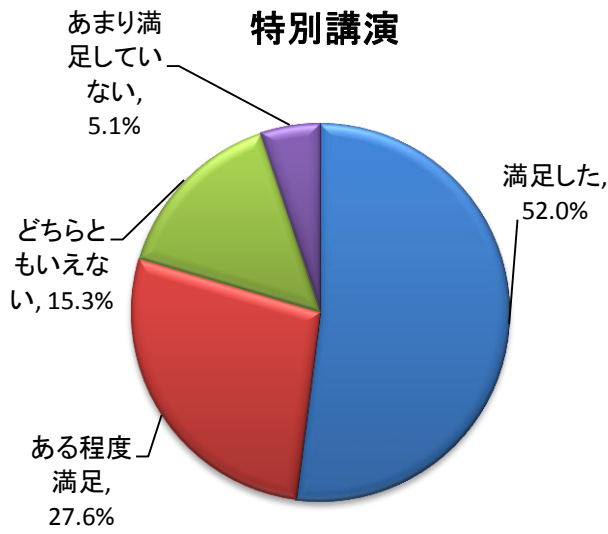


年代別

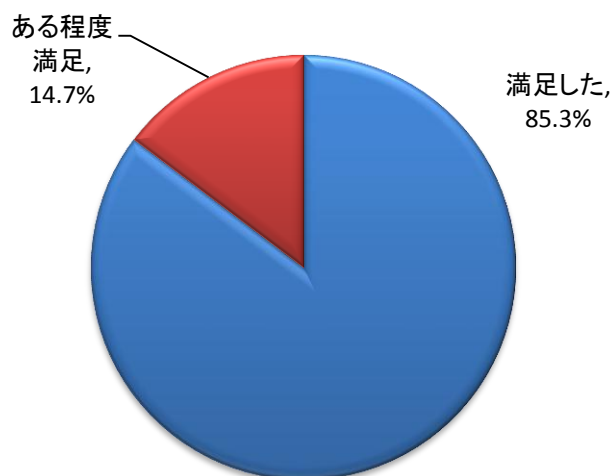


このフォーラムを何で知ったか

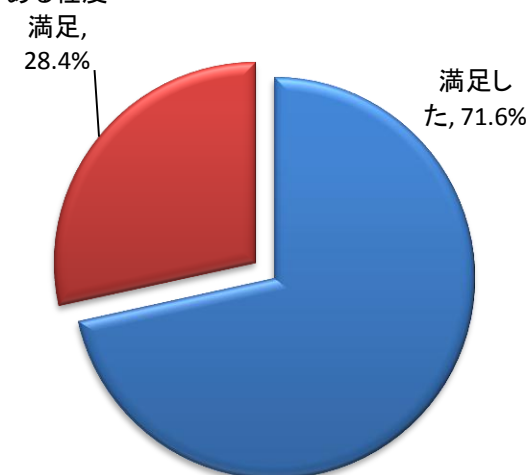




ワークショップ



フォーラム全体評価



アンケート結果の主な傾向

- ・アンケート回答者の男女の割合はほぼ同数となっている。
 - ・アンケート回答者の居住地は、県内は3/4、県外は1/4の割合となっている。
 - ・事業周知については、「所属団体から」情報を得た割合が約5割となっており、最も多い。次いで、「チラシやポスター」が約1割となっている。(複数回答)
 - ・特別講演については、「満足した」「ある程度満足」をあわせると、約8割となっている。
 - ・フィールドワーク報告については、「満足した」「ある程度満足」をあわせると、約9割となっている。
 - ・パネルディスカッションについては、分科会により、多少異なる部分はあるが、概ね「満足した」「ある程度満足」をあわせると、10割近い満足度となっている。
 - ・ワークショップについては、「満足した」「ある程度満足」で10割となっている。
 - ・フォーラム全体の評価については、「満足した」「ある程度満足」で10割となっている。
- ※全体的に参加者に満足いただいた内容のフォーラムであったことがうかがえる。